

「エダニク」

作／横山拓也

登場人物

- ・沢村（さわむら）
- ・玄田（げんだ）
- ・伊舞（いまい）

※日本における食肉文化は、明治以降に普及した。宗教的に牛馬の「屠殺」は不浄な行為というイメージがもたれた当時の日本において、屠畜する者が「穢れ」とみなされ、一般社会から隔離されてきた。地域差はあれど、被差別部落問題も絡んでおり、現在に至っても屠場に対して差別的な視線を向ける人もある。

※2001年にBSE感染牛が確認されて以降、2005年まではBSEの全頭検査が実施されていた。2005年以降、検査対象月齢が上がっていく。この物語は、200年初頭と設定する。

* * * * *

屠場（とじょう）。食肉の解体・加工作業を行なう場所。

屠場の一日は8時にはじまる。丸元では、7時30分出勤をA勤、8時出勤をB勤とし、14時頃までぶっ通しで作業を行う。やり終いで、仕事を終えたものから休憩、器具の整備や残務処理、筋力トレーニングなどに時間を費やし、A勤は15時30分に、B勤は16時に退社する。

東京近県のとある町の小さな屠場、ミートセンター丸元（まるもと）。

その研磨室。研磨室は、主に職人がナイフを研ぐところだが、休憩を兼ねる者が多いため、自然と休憩室としての機能も担っている。

長イス、丸イスなどが無造作に置かれている。長机には雑誌や新聞も。

部屋の隅には作業用のナイフを研ぐための研磨機。内線用の電話も引かれている。

冬のある日。

14時を過ぎ、休憩時間となった。

研磨室にインスタントのソース焼きそばを片手に持った沢村が入ってくる。

湯切りが終わった状態。適当なイスに座り、口にかけていたマスクを外し、ソースをかける。

カップ焼きそばには珍しい粉末ソースである。

沢村は怪訝な表情で、ソースと麺を混ぜる作業をしている。

そこにコンビニの袋をもった玄田が入ってきた。
玄田、ソースのニオイを十分に確認して、

玄田　すごいな。

沢村　玄田さん。

玄田　完全に空気を支配してるやん。

沢村　え？

玄田、適当なイスに座り、

玄田　今日も一日お疲れさん、と。

沢村　お疲れっす。

玄田　ああ、しんど。今日の種豚キツかったな。こんなでつかいのな。

と、サイズを手で示し。

沢村　電気3発打ちましたよ。

玄田　しぶとかったな。

沢村　俺、昔種豚の牙でブンってやられて太腿えぐられたことありますから。

玄田　怖あ。にしても、あいつ入ってくる前からなんであんなに臭うんやろな。

沢村　そりやタマ付きですから。

と、会話しながらも、ソースを混ぜる作業が難航している様子。

玄田、コンビニ二袋をガサゴソしながら、沢村の焼きそばに視線。

玄田　沢村くん、毎日毎日よう食うな。

沢村　え。

玄田　焼きそばばかり。

沢村　茹でソバですよ。ひとつも焼いてませんから。

玄田　ああ、そやな。

沢村、突如ストレスのピークが来て、

沢村　ああ、くそっ。

玄田　何、どしたん。

沢村　ちよっと聞いてくださいよ。

玄田　え？

沢村　最悪ですよ。

玄田　何が。

沢村 俺、もう、これからはソースちゃんとまんべんなくかけることにしますから。
玄田 え、何？ 何の宣言？

沢村 もう、どうもこうもないっすよ。

玄田 「どう」とか「こう」とか解らんけど、そうなん？

沢村 信じられます？

玄田 だから何をやねん。一向に話進まんやん。

沢村 ちよつとゴミいいすか。

玄田 ああ。

沢村、インスタント焼きそばの包装ビニールやソースの袋を玄田のコンビニ袋に入れた。

沢村、順を追って話し出す。

沢村 俺ね、中学のときね、

玄田 また話飛ぶ。

沢村 違いますって。順序立てて話してんるんすよ。

玄田、目で了解を送り、おにぎりを取り出す。

沢村 部活に加藤君っていう憧れの先輩がいたんですよ。

玄田 え、部活って何してたん？

沢村 軟式テニスですけど。

玄田 沢村くんがテニスって。ないわ。

沢村 ちよつと話、脱線するから。

玄田 っつて本筋あるん？ 本筋あつての脱線やで。

沢村 だから、その憧れの加藤君がね、こういうインスタント焼きそば食べるとき、ソースを真ん中一箇所にかかけない派だったんすよ。

玄田 ああ…。え？

沢村 だから。(手を焼きそばの上で回して) こうせずに、こう、一箇所だけかける派だったんですよ。

と、焼きそばの中央だけにソースをかけるゼスチャー。

玄田 あ、へえ。そういう派閥があつたんや。

沢村 それがすごいかつこ良かったんですよ、当時。

玄田 ちよつとその感覚分らんけど。

沢村 え、かつこ良くないです？ ソース一箇所ですよ？ 男らしくないです？

玄田 男、らしくないこともないか。

沢村 なんて言うか、焼きそばに迎合しないっていうか。

玄田 自分「迎合」の意味知らんと使ってるやろ。
沢村 俺、中学からずっとインスタント焼きそばのソースは一箇所だったんすよ。
玄田 ほんで何？ 今後どうするって？
沢村 まんべんなくかけます。
玄田 なんで？ ええやん別に。結局混ぜんねんから。

と、沢村の焼きそばを指す。

沢村 そりゃね、いつものUFOだったらいいですけどね、いや、UFOじゃなくて
も、このたぐいの焼きそばだったらいいんですけどね、これ、
玄田 あれ、今日UFOちゃうん？
沢村 なんか売り切れてたんですよ。
玄田 そうなんや。
沢村 で、これ。今日買ってきたやつ。粉末ソースだったんすよ。どういふつもりか
知りませんけど、調子乗って。
玄田 調子乗って。
沢村 見てくださいよ。この粉末ソース、一箇所にかけたらダメになるダメになる。
見て。

玄田、見て、

玄田 ああ、ほんまや。
沢村 俺がこれまでソースを一箇所にかけてきたことを嘲笑うように。
玄田 ふーん。

と、おにぎりを頬張って、雑誌なんかを広げ始めた。

沢村 ちょっと玄田さん聞いてます？
玄田 聞いているけど、飽きてきた。
沢村 なんすかそれ。
玄田 ていうか、それ早よ食べんと伸びんで。
沢村 解ってますよ。

と、ようやくソースと麺を絡める作業を止めて、焼きそばに手をつける。

玄田 沢村くん、俺がここ来てからずっと昼飯焼きそばちゃう？
沢村 玄田さん来る前からずっとですけど。
玄田 UFO。
沢村 はい。

玄田 ていうか、UFO売り切れてたんやったら、今日くらい別のもん食べたらええんちゃうん？

沢村 え？

玄田 カップラーメンとか、種類たくさんあるで。

沢村 いやあ、俺、これでリセットしてますから。

玄田 リセット？

沢村 特にUFOが一番強烈なんのでいつもはUFOにしてるんですけど、無いときは他のを試すっていうか。

と、食べつつ。

玄田、雑誌は早くも閉じて、

玄田 沢村くん、何年やったっけ？ この仕事。

沢村 13年ですね。

玄田 ニオイとか気になるん？

沢村 ああ、

玄田 あ、そういえば、作業のときマスクしてる。

沢村 マスクは返り血対策ですよ。たまに口に血入るときあるでしょ。

玄田 あれちよつと滅入るな。

沢村 別にニオイがどうか今更ないけど、UFOのソースがね、いったん俺の嗅覚を正常に戻すんです。リセットしてくれるんすよ。

玄田 え、最近仕事を終わってからシャワーして帰るんもリセットなん？

沢村 慣れ過ぎて、自分がどんなニオイ放ってるかとか気づけなくなったら怖いですよ。

玄田 わかった。自分これやろ。

と、立てた小指を突き出す。

沢村 はい？

玄田 女やろ。

沢村 バカですか。

玄田 言えや。

沢村 妻子持ちですから。

玄田 そんなん関係ないやろ。帰りに女の家寄ってんねやろ。

沢村、一息ついて。

沢村 息子ですよ。

玄田 え。

沢村 最近翔太が近寄らなくなつて。
玄田 ふーん。

玄田、ちよつと身をただして、

玄田 近寄らなくなつたつて、ホンマにニオイのせいでは？

沢村 うーん。嫁がぼかしてそういう風に言うんです。

玄田 翔太くんつていくつやつたつけ？

沢村 小3です。

玄田 自分の仕事のことは何て言うてるん？

沢村 一応お肉屋さんつて言ってますけど。

玄田 ふん。何か周囲とか気になり出すとしたら思春期入つてからやと思うけどな。経験上。

沢村 ああ……。学校でどうこう言われたとか、そういうのは無いと思いますけど。あくまでも、俺のニオイの問題で。

玄田 臭わんで、全然。

玄田も自分の身体のニオイを嗅いでみている。

玄田 気のせいちゃうか？

沢村 どうすかね。人間の感覚の中で、嗅覚つて一番最初にバカになると思ひません？

玄田 そんなもんやろか。

沢村 玄田さん、海外旅行とか行つたことあります？

玄田 あ、それどういふつもりで言うてるん。あるよ、俺かて。

沢村 俺ないんすけどね。

玄田 どないやねん。

沢村 たとえば韓国とかつて空港降り立つたらキムチのニオイするつて言うでしよ？

玄田 ああ、聞いたことある。

沢村 でもね、すぐにそんなニオイしなくなるんですよ。慣れるんです。

玄田 ふーん。

沢村 毎日働いてたら、ニオイなんて慣れちゃうんですよね。

玄田 まあな。

沢村 俺、ニオイに自覚持ちたいつていうか。そこから始めてみようつていうか。

玄田 ファブリーズとか、そういうの使つてみたらええんちゃう？

沢村 いや、かさばるでしよ。持ち歩くの。

玄田 ほんなら香水とか？

沢村 そういふ柄じゃないし。

玄田 え、なに。それで残った選択肢が焼きそばなん？
沢村 まあ。

玄田 ヘンコやなあ。
沢村 単純に好きなんですけどね。

と、焼きそばを掲げて。

玄田 そらまあ好きやないと毎日食えんわ。

沢村 基本はそこです。

玄田 そうか。翔太くんがなあ。

そこに内線電話が入る。

位置的に近い玄田が受話器を取って、

玄田 はいはい。

(牛の屠室から掛かってきた。人手が欲しいという)

玄田 今休憩入ったとこやけど。どないしたん？

(ある一頭の延髓が紛失したという)

玄田 延髓？

沢村 え？

玄田 またかいな。

(すぐじゃなくてもいいから来てほしいという)

玄田 メシ食ったら行くけど。ホンマええ加減にせんとあかんぞ。

と、受話器を置く。

玄田 どないなっとなねんここ。

沢村 また延髓紛失？

玄田 今ライン止めて全員で捜索中やって。

沢村 で集合掛かったんすか？

玄田 こっちの休憩ある程度終わったらでええって。

沢村 ああ。

玄田 信じられへんわ。あほちゃうか。

沢村 今、牛の屠室のチーフって、
玄田 知らん。若い誰かやろ。
沢村 うーん。いくら不景気だって言ったって、ベテランの職人リストラするから。
玄田 これで仕事ぬかってたら本末転倒やで。ただでさえ会社しんどいのにな、しょうもないミスして。誰やねん。
沢村 頭落とす辺りじゃないですか。
玄田 けったくそ悪い。

そこに、伊舞が入ってくる。

沢村と玄田が伊舞に視線。

伊舞 あ、どうも。

沢村と玄田は返さない。
沢村がなんとなく会釈。

伊舞 ここって研磨室ですか？

沢村 ああ、別屠室の。

伊舞 ベットシツ？

玄田 別格の屠室や。

伊舞 あ、へえ。

玄田 何が「へえ」やねん。

伊舞 あ、すみません。

沢村 玄田さん。(なだめる意)

玄田 ていうか自分誰。

伊舞 えっと。伊舞っていうんですけど。

沢村 畜産農家の人？

伊舞 ええ、まあ。こっちで待ってろって言われて。

玄田 誰に。

伊舞 うちの社長と、そちらの所長さんに。

沢村 新人さん？

伊舞 はい。まあそうです。

沢村 こっち座ったら？

伊舞 あ、ありがとうございます。

と、すすめられたイスに落ち着く。
ちよつと居心地の悪い空気が全体を襲う。
メシの続きに入る沢村と玄田。

玄田 パ。パツと食って行かな。
沢村 ですね。

おもむろに、

伊舞 いいニオイですよね。

沢村 え？

伊舞 焼きそばって、他人が食べてるの見たら食べたくありませんよね。

沢村 そう？

伊舞 はい。

沢村、容器を差し出して、

沢村 食べる？ もうほとんどないけど。

伊舞 ああ、いえ。すみません。

メシを食べる音だけがする。

玄田 せやけど、なんで別屠室の人間までかり出すんやろな。

沢村 まあ会社全体の問題ですから。

伊舞 あの。

玄田 なに？

伊舞 やっぱ「ベツトシツ」教えてもらってもいいすか。

玄田と沢村の視線が伊舞に刺さる。

伊舞 あ、ダメならいいんすけど。

玄田 沢村くん。

沢村 はい。

玄田 教えたって。

沢村 ええ、(不満の意)

玄田 食肉解体業務の周知も我々の仕事やで。

沢村 そうですよ。

伊舞からの視線が熱い。

どうも喋らないといけない感じになって。

沢村 牛の屠室と豚の屠室は見た？

伊舞 僕「トシツ」の意味が、

沢村 牛豚を解体するところ。

伊舞 ああ、さっき通ってきました。

沢村 あっちはベルトコンベア式になってて、たとえば牛だったら、頭に銃撃当てる人がいて、喉裂いて放血する人がいて、ピッシングする人、シャックルで吊るす人、頭落とす人、ってそこから何工程もあるけど、そうやって何人もの人間がライン作って回していくわけよ。

伊舞 ええ。

沢村 ちょうど、車の工場と逆に思ってもらったら。部品を組み立てて行くのと逆で、車を部品にバラしていくっていうか。

伊舞 ふーん。

沢村 あれ、ピンと来ない？

伊舞 いや、そんなことは。

沢村 うん。で、別屠室っていうのは、そっちのラインに乗せられないような病畜なんかが回ってくるんだけど、

伊舞 ビヨウチク？

沢村 病畜。

伊舞 病気の、畜？

沢村 まあ病気のもいるけど、搬送中に足が折れて歩けなくなったヤツとか、種豚みたいな規格外に大きいヤツとか、そういうの方が多いかな。

玄田 そこから説明せなアカンのか？

沢村 まあ新人さんですから。

伊舞 すみません。

沢村 あと、特別にこっちで潰してほしって言われてるブランド豚とかも。

玄田 あれが面倒いねん。

沢村 そういうわがままな牛さん豚さんを2人で解体作業するのがその別屠室。

と、別屠室がある方を指す。

伊舞 2人で。

玄田 あっちのラインでやってること全部な。

伊舞 すごいですね。

玄田 別にすごないって。前まではふた月に一回くらい、1週間ごと交代で別屠室担当しててんだけど、ついこないだ大幅にフリーの職人減ったから、俺らが専属で担当してるだけや、って解らんよな。

伊舞 はい。

玄田、伊舞の即答に呆れる。

沢村 ちなみにフリーっていうのは解体の全工程できる人ね。

伊舞 はあ。プロですね。
玄田 そらそやろ。これでメシ食ってねんから。
伊舞 ですよね。

玄田のメシが終わり、ゴミ袋にしたコンビニ袋を縛って、
玄田 よっしゃ。ほんなら行ってくるわ。延髄搜索の旅。
沢村 あ、待って。俺も行きます。

と、残りの焼きそばをかけ込む。

玄田 ええってええって。俺の方が後輩やねんから。
沢村 またそういうこと言う。
玄田 今日沢村くんA勤やろ。俺B勤やし。
沢村 そんな、30分しか変わらないでしょ。
玄田 シャワー浴びて、コレのとこ行かなあかんねやろ。

と、いたずらに小指を立てて、

沢村 ちょっと。
玄田 冗談やん。沢村くんはそのお兄ちゃんの相手したって。
沢村 え。

と、伊舞に視線。

玄田 放って行かれへんやろ。ウロチヨロされたら困るし。
沢村 ああ。
伊舞 別にウロチヨロとか、
玄田 一人で残されても困るやろ。
伊舞 それはまあそうですけど。
玄田 ほな、お疲れさん。

と、玄田は出て行く。

沢村 あ、お疲れっす。なんかすみませーん。

と、去った玄田に声を。
そして、食べ終わった焼きそばの容器を、縛られたコンビニ袋を開いて中に入れる。
沢村、一息ついて、伊舞に視線。

沢村 あのさ。

伊舞 はい。

沢村 焼きそばのソースって、どうやってかける？

伊舞 え？

沢村 うそ。何でもない。

伊舞 あ、はい。

沢村 コーヒーは？

伊舞 え、あ、はい。いいんですか？

沢村 いいよ。給湯室にコーヒーメーカーあるから、飲みたかったら勝手に入れて。

と、給湯室の方を指す。

伊舞 あ、じゃあ、後で。

沢村 あっちバタバタしてた？

伊舞 あっち。

沢村 牛の屠室。

伊舞 ああ、牛の。ですね。人がわんさか。

沢村 延髓紛失したらしくて。

伊舞 エンズイ。

沢村、自分の後頭部の下辺りを指して、

沢村 ここ。

伊舞 ああ。延髓。

沢村 呆れるっしょ。

伊舞 延髓ってそんなに貴重なんですか。

沢村 そりゃ、延髓をスクリーニング検査っていう、いわゆるBSEの検査に回すから。

伊舞 へえ。

沢村 「へえ」って。あれ、BSEは解る？

伊舞 解りますよ。

沢村 狂牛病の。

伊舞 はい。っていうか、一頭一頭、延髓を取り出して検査するんですか？

沢村 もうBSE問題騒がれてからずっとね。え本当に農家の人？

伊舞 うち、今は豚専門ですから。

沢村 かもしれないけど、この業界でやってくならそれくらい知つとかないと。

伊舞 ですよ。

沢村 その延髓が極まれになくなっちゃって。そういうときはライン停めて今みたい

に全員で探すんだけど、今年2回目でき。職人大量解雇してから三ヶ月の間に2回も。

伊舞 てか、それ出てこなかったらどうなるんですか？

沢村 そこでオジャン。出荷できないから、うちが補償しなきゃいけないだよ。

伊舞 うわ。そりゃ全員で探しますよね。

沢村 前も結局出て来ずで、現場相当ピリピリしたからさ。

伊舞 ああ。

沢村 玄田さんなんか「有り得へん」ってすごい怒ってたし。ああ、玄田さんってさっきの変なおじさん。

伊舞 なんであの人大阪弁なんですか。

沢村 そりゃ大阪の人だからでしょ。

伊舞 なるほどね。

沢村 大阪の屠場で20年近く勤めてたらしいし、俺なんかより断然キャリアあるからね。

伊舞 さっき後輩だつて言ってたのは、

沢村 ああ、ここに来たのが去年からだから。そういう意味で後輩。うちとしては玄田さんレベルの職人が来てくれて大助かりだけど。

伊舞 ふーん。

伊舞、
不用意な疑問を口にする。

伊舞 なんでここに来られたんですか？

沢村 俺？

伊舞 いや、

沢村 あ、玄田さん？

伊舞 はい。

沢村 さあ。

伊舞 こっちの方が収入がいいとか。

沢村 それはない。うちほど不景気などこないんじゃない。

伊舞 ネイティブな大阪人がなんでこっち出てくるんですかね。

沢村 それって変なの？

伊舞 いや、僕の大学時代の友達で大阪出身のヤツって、すごい地元愛語りますから。

沢村 玄田さんはそんなことないけど。

伊舞 なんか訳ありかな。

沢村 え、何訳ありって。

伊舞 いや、解らないですけど。なんとなく。

沢村 なんとなく？

伊舞 なんとなく、気になるじゃないですか。

沢村 何が。

伊舞 さあ。聞いてみましようか、なんで大阪離れたのか。
沢村 それどういうつもりで言ってる？
伊舞 どういうつもり？
沢村 悪意とかない？
伊舞 なんですか悪意って。

沢村、改まって伊舞を見つめる。

伊舞 え？
沢村 名前なんだっけ？
伊舞 伊舞です。

沢村 イマイくん、別に今の一連の発言がどうかじゃないけど、変な勘繰りとか余計なことしない方がいいよ。
伊舞 あ、はい。なんかすみません。
沢村 ピンと来てないでしょ？
伊舞 はい。

沢村 またあっけらかんと。
伊舞 いや、そんなつもりじゃ。

沢村 まあいいけど。この仕事やってると、外からの目には敏感にならざるを得ないからさ。

伊舞 はあ…

沢村 色々差別の問題とか根が深いから。屠場の歴史的な背景くらい知ってるよね。
伊舞 えっと。まあ、それとなく。

沢村 「それとなく」ってどれくらい？

伊舞 ああ、すみません。そんなには勉強してないです。

沢村 不用意なこと言ったら危ないよ。

伊舞 なんか、すみません。

沢村、呆れてみせて、ため息をひとつ吐く。

沢村 なんでそんなイマイ君が農家で働こうなんて思ったわけ？

伊舞 あー、宿命ですかね。

沢村 近しい仕事してるもんからしたら、イマイくんに宿命語られるの抵抗あるなあ。

伊舞 ああ。

沢村 ごめんね、偉そうなこと言っつて。

伊舞 いえ、そんな。

沢村 じゃあ宿命は撤回で。

伊舞 はい。

沢村 宿命じゃないとしたら何。

伊舞 じゃあ、そうですね、「潮時」って言った方がしっくりくるかも。
沢村 何の？ 何の潮時？

伊舞 いつまでも遊んでたらダメだなあって思ってた。

沢村 いつまでもっていつまで遊んでたわけ？

伊舞 つい最近まで、ですね。

沢村 出た。なんか労働者の雰囲気があったく漂ってないと思ったら。ニート？
伊舞 ばりニート？

伊舞 だったんですけど、そう呼ばれることに嫌気がさして。

沢村 いやいや、イマイくん違うでしょ。

伊舞 え。

沢村 そのニートの状態にいる自分に嫌気をさそうよ。

伊舞 アハ、うまいですね。

沢村 うまくないって。え、イマイくんって何歳？

伊舞 30になりました。

沢村 30？ 俺と3つしか変わらないの？ うわ、もう少し若いと思ってた。

伊舞 苦労してないですから。

平然として言っただけだ。

沢村 わあ。自分で言ったら世話無いつて。30までニートだったってこと？

伊舞 ですね。

沢村 それまで一回も勤めず？

伊舞 いや、そりやバイトは多少しましたけど。なんか働いたら負けっていうか、そういう思いがあったんですよね。

沢村 今のとまったく同じ発言してる人テレビで見た。

伊舞 でも今は違うんですよ。ついこないだまでは確かにニートでしたけど、もう30ですし、気持ち入れ替えようって思ってた。

沢村 なんか堂々と言い放ってみたのはいいけどさ、それを普通の人はだいたい二十歳前後に思うわけだから。高校卒業のときか、大学卒業のときに。

伊舞 そうなんですけどね。

沢村 俺33なんだけどさ。嫁さんと小学生の息子養ってるわけでき。

伊舞 おお、すげえ。すごいですね。

沢村 普通でしょ。

伊舞 なんか自分には全然想像できなくて。

沢村、携帯の待ち受け画面にしている家族の写真を伊舞に見せる。

伊舞 お子さん？

沢村 うん。小ちゃいときのだけど。こっち奥さん。

伊舞 ああ。

沢村、そこそこ見せたら携帯をしまい、

沢村 イマイくんも頑張らないと。

伊舞 え。

沢村 結構ガタイいいし、しつかり鍛えたらものになると思うけど。現場は体力だからね。

伊舞 いや、僕できたら経営の方で関わりたいと思ってて。

沢村、伊舞の返答にすっかり呆れて、

沢村 甘い。全然甘い。

伊舞 え？

沢村 そりゃ夢持つのはいいよ。でも、そういうのって働き出したばかりの人が言うことじゃないでしょ。

伊舞 ああ。

沢村 なんで最近の若い子は楽ばっかりしたがるのかな。

伊舞 経営も楽なことばかりじゃないと思いますけど。

沢村 ああ言ったたらこう言う。安易だろ、考え方が。あ、ごめんね、「だろ」とか言ってる。

伊舞 いえ。

沢村 結局座ってたいってことでしょ。肉体労働避けたいってのが丸見えだもん。見え見えだもん。

伊舞 まあそれもありませんけど。

沢村 ほら丸見え。見え見えか。ちゃんと現場きっちりこなしてからだよ、色々夢語っていいのは。

伊舞 はあ。

沢村 何だかんだ言って体育会系だからさ、やつぱりこの業界。ボディビルとか格闘技とかやってる人どれだけいるか知ってる？

伊舞 さあ。

沢村 まあそれはいいんだけど、俺はね、今日俺と出会ったことをきっかけにね。なんか火がついてくれたらって思ってる。今度イマイちゃんと会ったとき、「お、顔つき変わったなあ」「板ついてきたなあ」って言えるようにがんばってほしいの。

伊舞 はあ。

沢村 で俺はさ、「イマイくんあるとき経営とかバカなこと言ってたよなあ」って。で、イマイくんは「ちよっともう沢村さんやめてくださいよ」「若気のいたりっすよ」とか言ってる、「おし、飲みに行こうぜ、イマイくんのおごりで」とか

なつてき。「なんで僕のおごりなんですか」とか言って、俺、そうなりたいの。ただそれだけ。

伊舞 はい。ありがとうございます。

沢村 まだだよ。心にもない「ありがとうございます」。

誇張した声真似で。

伊舞 そんな言い方してないでしょ。

沢村 俺、イマイくんみたいなのと同じ「若者」っていうカテゴリーでくくられるの嫌なんだよ。あ、ごめんね、「イマイくんみたいなの」とか言って。

伊舞 いや。

沢村 愛だよ、これ。愛情で言ってんの。

伊舞 それは、はい。

沢村、ひとつ溜息をついて、

沢村 まあね、こういうこと言うのって、実は裏返しでもあるんだけどさ。

伊舞 裏返し。

沢村 うらやましいんだよ。だって俺、それこそ二十歳そこそこで結婚して子供も作って、嫁さんとガキ養わなきゃってずーっと働きづめでさ。人生でちゃんと遊んでた時期って、正直もう小学生とかまでさかのぼるからさ。

伊舞 うーん。それはちよつと人生損してますよね。

沢村、伊舞に視線。

沢村 あ。俺今カチンと来た。

伊舞 え、あ、すみません。

沢村 自分でもそう思ってるけど、人生損してるって思ってるけど、他人に言われたらカチンと来ちゃった。

伊舞 ああ、すみません。ごめんなさい。

沢村 まあいいけど、実際そうだし。

伊舞 ああ。

沢村 あ、じゃあさ。ニート期間中に「これは遊んだなー」っていうのをさ。「これはとことん遊んだあ」っていうの、ちよつと教えてよ。

伊舞 え。

沢村 だって俺より10年も遊びに時間費やしてきたんだからさ、俺が今後どうがんばっても得られない経験値があるわけでしょ。

伊舞 はあ。

沢村 それを教えろっての。

伊舞 これば遊んだなーって言うのですか…
沢村 うん。もう悪行とか全部、あらいざらい。

伊舞、思案して、

伊舞 そうですねー。うーん。

伊舞、ハツと思い出し、思わず笑う。

沢村 お、来た？

伊舞 はい。2年くらい前の話ですけど、
沢村 おお。

伊舞 いいですか？

沢村 いいよ。

伊舞 僕、2年くらい前、カラオケにハマってる時期があつて。

沢村 カラオケ。

伊舞 なんかね、ウタヒロで3日連続でオールして。あ、3日連続って言っても、朝帰って、夕方まで寝てまた夜繰り出すんですけど。毎日ツレのメンツは変わって、僕だけはいつもいる、みたいな。もうね、3日でウタヒロに入ってるコブクロの曲、ガツツリ全部制覇しましたから。ノド枯れながら。あ、で、しかも、3日目にはウタヒロの店員さんに覚えられちゃって、「3日連続ですよ、すごいですね」とか言われて。伝説みたいになっちゃって。あれはさすがにヤバかったですねえ。

伊舞、遠い目をする。

沢村、期待を大きく下回るトピックスにうんざりしながら、

沢村 え、それ？

伊舞 はい？

沢村 それがニート時代の一番の経験値？

伊舞 あれ？ すごくないですか？

沢村、啞然として、

沢村 うわあ、イマイくんの10年って。

伊舞 あ、じゃあこれは？ デニーズで18時間喋りたおした伝説。4食デニーズで食べましたから。昼、夜、夜食、朝メシって。

沢村、静かに首を振り、

沢村 残念すぎる。残念すぎる。

伊舞 なんですか。

沢村 残念な時間を過ごして来たことにさえ気付いてない現時点のイマイくんも残念。

伊舞 ええ、すごい楽しかったんですよ。

沢村 勝手だけども、俺は、自転車で日本一周したとか、バックパッカーで東南アジア横断したとか、なんかそういうの期待してたから。

伊舞 えー、そんなことしてなんの意味があるんですか。

沢村 意味？ じゃあウタヒロとデニーズにどんな意味がある？

伊舞 友情の深め合いですよ。

沢村 しょぼい。

伊舞 しょぼくないですよ。少なくとも僕の周辺はそうやって遊んでましたから。

沢村 はあ。3つ下なだけで、このジェネレーションギャップは何？

伊舞 何でしょうね。

沢村 ご両親悲しんでるよ。

伊舞 そんなことないですよ。

沢村 あるって。

伊舞 だって、僕が働くって言ったら泣いて喜びましたから。

沢村 まあ今となってはそうかもしれないけど。

伊舞 十分遊ばせてもらったし、これからは恩返ししようと思って。

沢村 ふーん。で、結局なんで農家なわけ？

伊舞 それは、親もそうだから。

沢村 あそうなの？ え、そうなの？

伊舞 はい。

沢村 じゃあ、親父さんに口利いてもらったってわけ？

伊舞 まあ、そういうことになりますかね。

沢村 とことん親に迷惑かけてる。

伊舞 別に迷惑はかけてないですけど。

沢村 どの農場紹介してもらったわけ？ なんていうところ？

伊舞 ファームです。

沢村の頭が一瞬空白になる。音にしてみる。

沢村 イマイファーム。

思索する時間があり、

沢村 え、伊舞ファーム？

伊舞 はい。
沢村 え、伊豆の「伊」に「舞う」の伊舞ファームさん？
伊舞 はい。

伊舞を指して、

沢村 イマイくん。
伊舞 はい。
沢村 …伊舞さん？
伊舞 さん付け。
沢村 伊舞ファームの？
伊舞 伊舞です。
沢村 跡継ぎってこと？
伊舞 まあいずれは。
沢村 あ、経営！
伊舞 いずれは、ですけど。

沢村、舐めるように伊舞を見つめてから、姿勢を変えて、

沢村 申し訳ございません。知らなかったもんで。
伊舞 ちよっと、急に何ですか、その低姿勢。
沢村 調子乗ってすみません。
伊舞 やめてくださいよ。そんな解りやすい態度。
沢村 だって、伊舞ファームさんって言ったらうちの大得意さんだから。今、うちは伊舞ファームさんでもつてるとこあるし、
伊舞 いや、こちらこそ、いつもお世話になってます。
沢村 いえ、うちの方がお世話になりっぱなしで。最近は何と、さっきの玄田さんで、そちらの伊舞黒豚をつぶさせてもらってます。
伊舞 つぶさせて？
沢村 解体を。さっき言ってた別屠室で。
伊舞 ああ、なるほど。
沢村 すみません、玄田を筆頭に、数々の無礼、大変失礼いたしました。
伊舞 無礼って別に。
沢村 俺、ミートセンター丸元の沢村って言います。
伊舞 あ、伊舞ファームの伊舞トオルです。

と、伊舞は手際よく名刺を出す。
受け取る沢村。自分の胸元などをまさぐるが名刺はない。

沢村 すみません、俺、名刺、あ、ロッカーの中だ。
伊舞 いや、全然大丈夫ですよ。沢村さん。もう覚えましたから。

沢村、卑屈な思い込みを持ち、

沢村 ちよつと。変な覚え方しないでくださいよ。

伊舞 変な覚え方ってなんですか。

沢村 いや、さつき、俺、調子乗って、調子乗ったわけじゃないですけど、ほら、間違えて色々あることないこと言っちゃったし。

伊舞 え？

沢村、突如深く頭を下げ、

沢村 すみません。さつきの失言、全部撤回します。

伊舞 え、そんな、事実な部分もあつたし、意外にそうやって言ってくれる人がいなかったから、生き方考える機会になりました。

沢村 すみません。偉そうなこと。

伊舞 やめてくださいよ。

沢村 やめません。

伊舞 いや、困ります。

沢村 許してくれるまでやめません。

伊舞 許すも何も。まあちよつと座りましょうよ。ね。

と、沢村の頭を上げさせて、

伊舞 あ、コーヒーでも飲みましようか。えつと、給湯室でしたっけ、

と、給湯室に視線を送るや、

沢村 はい。入れてきます。

と、即行給湯室へ向った。

伊舞 あ、ちよつと、そんなつもりじゃ。

伊舞、取り残され、仕方なく座る。

沢村がコーヒーメーカーに水だ豆だをセットする時間。

伊舞は一人、机にある雑誌なんかをパラパラとめくったり。

一通りセッティングを終えた沢村が戻り、

伊舞 あ、すみません。
沢村 いやいやいやいや…

伊舞の「すみません」に対してなのか何なのか、「いやいや」言いながらイスに座る。

沢村 しかし、すごいですよね、ウタヒロで3日とか。

伊舞 沢村さん？

沢村 あと、デニーズ？ デニーズで何時間でしたっけ？

伊舞 もうニート時代の話はいいじゃないですか。

沢村 いや本当に。カラオケ行ってないなあ最近。コブクロって沁みますよねえ。グツとくるっていうか。

伊舞 沢村さん。

沢村 あ、コブクロってなんでコブクロって言うか知ってます？ 小渕さんと黒ナントカさんの二人組だからなんですって。

伊舞 黒田でしょ。知ってます。

沢村 おお、さすが。コブクロフリーク。

伊舞 もうやめてくださいよ。

沢村 あ、ダメですか、コブクロトーク。

伊舞、返さない。

沢村 あれ、怒ってます？ やっぱりさっきの怒ってます？

伊舞 怒ってませんって。

沢村 怒ってるもん。目が。もう許してくださいよ。

伊舞 沢村さん。

沢村 はい。

伊舞 許すとか許さないとかじゃないですけど、もう許しますから。

沢村 本当に？

伊舞 はい。だから普通にしてくださいよ。

沢村 はい、いや、俺、普通ですよ。

と、言いながらも、バツが悪い。会話が停滞する。

沢村 で、今日は…？

伊舞 え。

沢村 今日はどうして。

伊舞 ああ。親父の、あ、社長の運転手で。

沢村 付き添いで。

伊舞 ええ。ついでに、ついでに言ったら失礼ですけど、ちよつと屠畜の見学ができたらと思つて。

沢村 ああ、だとしたらちよつと来るの遅かったね。遅かったですね。

伊舞 あの言葉遣い、普通でお願いします。

沢村 あ、うん。

伊舞、時計を見て、

伊舞 このくらい時間で終わっちゃうんですか？

沢村 まあだいたい朝8時から作業始まつて、本当は休憩入れなきやいけないんだけど、作業効率上、ぶつ通しで2時まで。2時からメシ休憩があつて、後は、終業時間まで自由。

伊舞 へえ。休憩長いですね。

沢村 この時間使つてジムで鍛える人とかもいて。あ、さつき言つてたボディビルやつてる人たち。

伊舞 実質働くのつて6時間くらいですか？

沢村 まあ5、6時間。あ、短時間に思うかもしれないけど結構キツイですよ。体力だけじゃなくて神経も使いますから。

伊舞、敬語の件はもう気にせず、

伊舞 解体作業ってどんな感じなんですか？

沢村 うーん。作業自体は慣れちゃえば大したことは。まあ刃物使うから怪我はつきもんだけど。ですけど。

伊舞 それで神経使うと。

沢村 まあ、怪我のことよりも、作業失敗が許されないから。

伊舞 作業失敗。

沢村 解体の途中で、肉に血のシミつけてもダメだし、最後背割りして枝肉にするのも、きれいに半分にししないと作業失敗になつてうちが補償しなきやならないから、ですから。

伊舞 厳しい。

沢村 俺はまだ半人前ですけど、職人の技ですよ。ホント。

伊舞 はあ。

伊舞、何度も頷き、

伊舞 いや、ありがとうございます。

沢村 え。

伊舞 僕、屠場のことまだ何も知らなくて。

沢村 まあ仕方ないですよ、それは。

伊舞 うちの親父も、あ親父じゃない、社長もこちらの仕事をよく知っておけて。まあ自分とこの豚がどういう流れで市場に出て行くかくらい知っておいた方がいいかもしれないね。

伊舞 はい。

沢村 今度機会があったら現場見学に来たらどうですか。

伊舞 はい。また色々教えてください。

沢村 教えるなんて、そんな。俺は何も。

そこに、内線電話がかかる。

沢村 あ、ちよっとすみません。

沢村、受話器を取って、

沢村 はい、沢村です。ああ、国本さん、どうもお疲れ様です。

相手は牛の屠室のチーフである国本という男。

沢村 聞きましたよ、延髄の件。まだ見つからないんですか？

(見つからないとのこと)

沢村 まずいですね、それ。頭落としてたのって誰ですか？

(柳という人物だという)

沢村 ああ、柳さんか。

(その柳という男が行方不明になったという)

沢村 え、柳さんいなくなっただんですか？ 責任感じて？

(知らないという)

沢村 隠れたってどうしようもないのに。ねえ。まあ、まず柳さんより延髄優先ですよね。

(沢村くんも協力してくれ、という)

沢村 え、協力って、俺無理ですよ。あ、さっき玄田さんが行ったでしょ、

(見てない、という)

沢村 いや、そんなはずないですよ。俺の分まで探してくるって、はりきって行き
ましたから。

(いいから、人手がほしいから早く来い、という)

沢村 それが、今、大事なお客さんが見えてて、

と、伊舞に視線。

国本は乱暴に電話を切った。

沢村 ちよつと？ もう。

沢村、受話器を置いて、イスに座る。

沢村 いやいやいやいや…

伊舞 え、いいんですか？

沢村 いいんですよ。

伊舞 でも。

沢村 あ、やばい。コーヒー忘れてた。ちよつと見てきます。

と、給湯室へ。

伊舞、また所在なく、携帯なんかをいじったり。

しばらくあって玄田が戻る。手には何やらナイロン袋を持っている。

ゆっくりと扉を開いて、中を探るように。

伊舞 あ、どうも。

玄田 なんや、お兄ちゃんまだおったんかいな。

伊舞 すみません。

玄田、ようやく研磨室に入り、

玄田 沢村くんは。

伊舞 今あっちに、

と、給湯室を指す。

玄田、ロッカーにナイロン袋をしまう。

伊舞 どうしました？

玄田 何が？

伊舞 それは？

玄田 関係あらへん。

玄田、給湯室に向かいながら、

玄田 沢村くん。

そこに、御盆にコーヒーを2セット乗せて戻る沢村と遭遇。

玄田 うわびつくりした。

沢村 なんですか。

玄田 何してるん。

沢村 コーヒーを。

玄田 あ、ありがとう。

と、御盆の上のコーヒーをひとつ取ろうとするが、

沢村 ていつ！（かわす）

玄田 ちよう！

沢村 危ないな。

玄田 持ったろう思たんやんか。

沢村 これ玄田さんのじゃないですから。

玄田 俺のマグカップやん。

沢村 他に無かったから。ちよつと借りますね。

玄田 は？

沢村 ああ、飲みたかったらまだポットに入ってますから。あ、カップないけど。

沢村、玄田を過ぎて、伊舞にコーヒーを渡す。

沢村 はい、お待たせ。

伊舞 あ、すみません。

沢村 どうぞ。

と、勧める。

玄田が伊舞に渡されたコーヒーを奪う。

伊舞 あ。

沢村 ちよつと何やってんすか。

玄田 返せ、俺のカップや。

沢村 だからちよつと貸してくださいって言ったじゃないですか。

玄田 なんで俺のマグカップ使うねん。

沢村 もう、小さいな（人として小さいという意）。

玄田 なんやと。

沢村 （伊舞に）すみません。

伊舞 いえ。

沢村 こっち、飲んでください。

と、自分のマグカップを渡す。

伊舞 あ、ごめんなさい、逆に。

沢村、玄田を諭すように、

沢村 玄田さん。

玄田 ちよつと沢村くん。

沢村 なんですか。

玄田 どないしてん。

沢村 え？

玄田 何をいきなり飼いならされてんねん。どういうことやねん。この10分そこらの間に何があってん。

沢村、ひとつ咳払いを入れ、伊舞を指し。

沢村 わかりませんか？

玄田 は？

沢村 伊舞さんです。

伊舞 どうも。

玄田 さつき名前聞いたし。

沢村 「伊舞さん」ですよ。ピンと来ませんか？

玄田 なんやねん。

沢村 にぶい。にぶいですよ、玄田さん。

玄田 ていうか、沢村くん、そんなん言うてる場合ちゃうって。

沢村 ちよつと切り上げないでくださいよ。

玄田 は？
沢村 この方、なんと、伊舞ファームの御曹司、伊舞トオルさんです。
伊舞 御曹司とかやめてくださいよ。
沢村 ほら、玄田さんの顔がみるみる青ざめていく。
玄田 何を言うどんねん。そんな今どうでもええねんて。
沢村 玄田さん。うちの大得意先の伊舞ファームさんですよ。
玄田 だから何。
沢村 だから…、敬いましょうよ。

玄田、舌打ちをひとつ入れてから、伊舞の前で手をパンパンと合わせる(二拍手一礼)。

玄田 と。
沢村 ちよつと玄田さん。
玄田 沢村くん。これ、思ったよりヤバいで。
沢村 やつと気付きましたか、自分の愚行に。愚かな行為に。
玄田 ちやう。延髄や。
沢村 え？
玄田 全然見つからんぞ。
沢村 あ、さっき内線かかってきましたけど、牛の屠室のチーフって国本さんでしょ。
玄田 知らん。
沢村 知らないことないでしょ。国本さんから聞きましたけど、柳さん。柳さんなんか逃げたらしいですよ。
玄田 え？ なんで柳さんが逃げんねん。
沢村 頭落としてたの柳さんらしくて。責任感じてか、知らないですけど。
玄田 便所かどっか行つとつただけちやうか。
沢村 いや、だって、国本さんが。

伊舞がコーヒーをすすりながら、

伊舞 なんか、大変そうですね。
玄田 やかましわ。
伊舞 すみません。
沢村 玄田さん。
玄田 沢村くん。
沢村 はい。
玄田 柳さんも、国本くんもクビ切られたら困るやろ。
沢村 クビってことはないでしょ。別に。
玄田 言うてるうちに所長降りてくんぞ。
沢村 そうなんすか？

玄田 どうしたらいい？

沢村 どうしたらって言われても。

玄田 面倒臭いことになったわ。

沢村 なんか玄田さん急に親身ですね。柳さん絡んでるからすか？

玄田 別にそんなんちやうし。

沢村 で、なんで玄田さん戻ってきてるんですか。見つかってないなら探さなきゃ。
せやから沢村くん呼びに来たんやんか。

玄田 え。

沢村 交代。沢村くんとバトンタッチ。

玄田 嫌ですよ。

沢村 嫌って何。

玄田 俺、伊舞さんと話あるし。

沢村 なんやねん話って。

玄田 食肉解体業務の周知ですよ。

沢村 言うてる場合ちやうやろ。

玄田 大事な取引先でしょ。

伊舞 こんなワガママ業者。

沢村 ワガママ？

玄田 ちよつと玄田さん。うちにとつて伊舞ファームさんはね、

沢村 うちの職員とどっちが大事やねん。

玄田 どっちも大事です。だから玄田さんそっちお願いしますよ。ほら、俺A勤です

沢村 し。そろそろ上がらないと。

玄田 あ、そういうこと言う？ 沢村くん仲間裏切るん？

沢村 なんでそうなるんですか。玄田さんだって戻ってきたくせに。

玄田 俺は沢村くんを呼びにきたんやんか。国本くん「沢村は」ってえらい剣幕で言
つとつたで。電話もあつたんやろ。

沢村 ありましたけど。

玄田 ほら。

沢村 でも。(伊舞を見る)

優雅な感じでコーヒーをすすっていた伊舞、慌ててコーヒークップを置き。

伊舞 僕は別に大丈夫ですから。

玄田 うん。ほら。ちよつとでも顔出さんと後々色々言われんで。

沢村 じゃあ、玄田さんも一緒に行きましようよ。

玄田 なんでやねん。

沢村 だって、二人きりにしたら何言うか。

玄田 別に何も言わんわ。出入りの業者一人置いてかれへんやろ。

沢村 だから僕がその担当になりますって。

玄田 沢村くん、今、ホンマそんな言うてる状況ちゃうで。向こう行ったら解る思
うけど。

沢村 もう、解りましたよ。

と、行きかけて、

沢村 余計なこと喋らないでくださいよ。

玄田 何を喋る思ってるねん。

沢村 即行見つけてきますから。あ、伊舞さん、ごゆっくり。

伊舞 あ、はい。

沢村、出て行った。

玄田、大きく息を吐く。

そして、伊舞に、

玄田 よし。帰り。

伊舞 え？

玄田 もう帰ってええで。

伊舞 いや、でも。

玄田 多分所長も会議どころちゃうし。お宅の社長さんも帰れ言われてるんちゃう。

伊舞、自分の携帯を見て、

伊舞 終わったら電話かかってくることになってますから。

玄田 あれちゃう？ 圏外ちゃう？

伊舞 違うと思いますけど。

玄田 ちよつと見てきたら？

伊舞 え。

玄田 会議室。

伊舞が玄田を見つめる。

玄田 なに。

伊舞 なんで出て行かせようとするんですか？

玄田 は？

伊舞 なんかおかしくないですか？

玄田 何がやねん。

伊舞の視線が刺さる。

玄田 うつといからやろ。

伊舞 うつとい？

玄田 ここ休憩室やねんから、休憩させてえや。

伊舞 ここ研磨室って言ってたじゃないですか。

玄田 俺らはここで休憩すんのじゃ。

伊舞、訝しがる視線。

玄田 何やねん。

伊舞 解りました。

と、携帯を手に。

伊舞 ちょっと電話してみます。

と、電話をかけはじめ。

時折、玄田に視線を投げながら。

玄田 腹立つなホンマ。

伊舞 あ、もしもし。タオルだけど、今いい？

と、言いながら一旦部屋を出た。

玄田、イスに座って頭を抱える。

頭を上げ、伊舞が出ていった扉に一瞥やる。

そして、ロッカーからナイロン袋を取り出し、中を見る。

中身は今みんなが躍起になって探している延髄である。

玄田 ちっ。

と、小さな舌打ちをして、延髄は出さずに確認だけする。

ナイロン袋を何らかの形で処理したい玄田。

袋を持ったままウロウロして、

玄田 もう、どうしたらええねん。

伊舞が戻る気配がして、袋を縛り、もう一度ロッカーへしまおう。
イスに座り、

玄田　くそ。

と、ひとりごつ。

ほどなく電話中の伊舞が戻る。

伊舞　オッケー。了解。ラジャです。はい、はい。

と、言いながらイスに座る。

玄田　で、なんで座んねん。

伊舞　やっぱりもうちよつと待ってるって言われて。

玄田　誰が。

伊舞　うちの社長です。まだ会議してるみたいですけど。

玄田　ほんならあつちで一緒に話参加してきいや。

伊舞　そういうわけにはいかないですよ。新人ですから。

玄田　もう。

玄田、面倒臭そうにコーヒーを飲む。

伊舞、鼻を利かせて、

伊舞　なんか臭いません？

玄田　は？

伊舞　なんかちよつと生臭いっていうか。

玄田　家畜つぶしとんねん。俺のニオイや。

伊舞　ああ。

伊舞、渋い顔のまま、

伊舞　コーヒーもう一杯もらおう。いいですか？

玄田　勝手にしい。

伊舞　じゃあ。

と、マグカップを持って給湯室へおかわりを入れに行く。

玄田は伊舞の動向を確認しつつも、身動きが取れない。

伊舞がちよつとして戻り、

伊舞　なんか、とんでもない日に来ちやっみたいですね。

玄田　ほんまやで。

伊舞　その逃げてる柳さんっていう人は、

玄田 自分関係ないやろ。
伊舞 ああ、ですよね。じゃあ話題を変えて。
玄田 もうええって。

伊舞、構わず。

伊舞 やっぱり血眼（ちまなこ）になって探す感じですか？ 延髄。

玄田 はあ？

伊舞 だって、すごい損なんですよ？

玄田 そらそや。

伊舞 牛一頭の補償ってどんなもんなんですか？

玄田 知らんて。

いたたまれない空気が漂う。それを玄田が切って、

玄田 自分。

伊舞 あ、はい。

玄田 伊舞ファームの跡取りなん？

伊舞 まあ、将来的には。さつき沢村さんとも喋ってたんですけど、僕、まだ入社し

たてなんで何も解ってなくて。

玄田 ふーん。ほんなら社長さんに言っというて。

伊舞 はい？

玄田 お宅の豚をわざわざ別屠室でつぶさせるんやめてくれって。

伊舞 はあ。

玄田 どんなこだわりあるんか知らんけど、あんなもんライン乗せてやった方が効率ええに決まったある。職人減った今は特にな。

伊舞 あれ。

玄田 何やねん。言うてる意味、解らんか？ 解らんやろな。

伊舞 いえ。それなりに解ります。

玄田 それなりにでは困んねん。

伊舞 うちの伊舞黒豚、喜んで受け入れてくださっているのかと思ってました。

玄田 誰が喜ぶねん、あんな面倒くさい豚。所長くらいやろ喜んどのんわ。こんなわがまま業者の言いなりになんて。

伊舞 でも、ミートセンター丸元さん、うちでもってるところもあるみたいですし、それなりの要望は聞いてもらっても。

玄田 そんなん知ったことあるか。

伊舞 でも、うちが撤退したら困るでしょ。

玄田 何も撤退とは言うてへんやろ。手でつぶさせんのをやめる言うてんねん。

伊舞 あのちよっとすみません。その「つぶす」っていう言い方。

玄田 なんやねん。

伊舞 ちよつと生理的にダメで。

玄田 知るか。

伊舞 まあ、とにかく、うちとしては、手作業でやっていただかないことには。なんや、撤退か？ ふん。一人前に駆け引きみたいなこと言いよつて。

伊舞 そうじゃないですけど、一応、ブランド豚としてやってますから、それなりに商品価値高めないと。

玄田 ラインでつぶすんと手でつぶすんとどう違ううちゅうねん。

伊舞 セーターでも手編みと機械編みじゃ風合いが違うじゃないですか。

玄田 豚とセーター一緒にすんな。肉に風合いもクソもあるか。ライン乗っても全部手で捌くねんぞ。

伊舞 かもしれないですけど、うちとしては、誰が生産して、誰が運搬して、誰が解体して、誰がパッキングして、つてすべての行程において責任の所在を明らかにさせることも伊舞黒豚の付加価値として考えてるんですよ。

玄田 誰かの受け売りそのままの口ぶりやな。

伊舞 あれ、解ります？ さつき車で来きたとき親父に。あ、社長に。

玄田 そんなことやと思ったわ。

伊舞 でも、たった二人でやつてるとは思いませんでした。うちの豚。

玄田 二人しかおらんくなつたんや。頭からケツまでやれるんが。普通やったら病畜だけで手一杯のところ、むりやりあんたんとこの豚つぶさせられとんねや。ほんまけつたくそ悪い。

と、コーヒーを飲み干す。

伊舞 けつたくそ悪いですか。

玄田 ああ。

伊舞 そんな気持ちで殺されるうちの豚もたまつたもんじゃないですね。

玄田、カチンときた。

玄田 ちよう待て。

伊舞 はい。

玄田 何やねん今の。どういうつもりで言うとんねん。

伊舞 あ。ああ、「殺す」つてのはまずかったですね。「解体」ですね。すみません。そんななんどつちでもええねん。

伊舞 あれ。

玄田 こつちが引つ掛かつてんのは、「そんな気持ちで」つてとこや。そんな気持ちもどんな気持ちもないわ。つぶすんが仕事や。

伊舞 ああ。でも、「けつたくそ悪い」つて思われながら、うちの豚解体されるのっ

て、抵抗ありますよ。

玄田 関係あらへん。仕上がり見たことあるか？ ええ仕事してんぞ。

伊舞 結果だけじゃないんですよ、伊舞黒豚は。その過程に美学を持ちたいんです。あほくさ。ほんなら自分、何か仕事するとき、何でもええわ、なんか荷造りして発送する仕事を「面倒臭いな」「けったくそ悪いな」って思いながらしたことはないんか？

伊舞 それ例えが飛躍してますよ。

玄田 一緒や。

伊舞 でも、畜産農家としたら伊舞黒豚を解体することに誇りを持ってほしいじゃないですか。

玄田 それがあほらし言うとなねん。話にならんわ。

伊舞 こっちからしたら命を預けてるんですよ。

玄田 命？ 命？ 自分本気で言うてるん？

伊舞 何か変ですか。

玄田 もうちよつと勉強してきい。そんな気持ちで仕事についたらアカンで。

伊舞 玄田さんに気持ちのこと言われたくないですね。

玄田 自分とは話できんわ。

伊舞 話戻しますけど、

玄田 話できへん言うてんねん。

伊舞 玄田さんは、うちの豚はやりたくないってことですか。

玄田 やらんで済むならやりたくないな。

伊舞 そうですか。

少しの間の後、流れ上、今日ここに来た真意を話すことにした。

伊舞 実はね。

玄田、目だけやる。

伊舞 出荷が増えるんですよ。

玄田 は？

伊舞 うちも繁殖に関する研究を長年進めてて。来年あたりから、3倍になるって。は？

伊舞 それで今日、トップ会談つてことに。

玄田 3倍って、そしたらもうラインに乗せる以外にないやろ。

伊舞 別屠室での解体はムリと。

玄田 当たり前や。職人の数の話だけちゃうぞ。専用の屠室まで必要になる。

伊舞 それでもうちが手で解体してもらうことにこだわったら？

玄田 他あたってくれっちゅう話やろ。

伊舞 なるほど。

伊舞、何度か頷いて、

伊舞 現場の意見も聞けて良かったです。

玄田 あ？

伊舞 いや、そこそこの職人さん抱えてて、うちみたいなわがまま、あ、今日までわがままとは思ってなかったですけど、聞いてくれるところって、なかなか無いじゃないですか。

玄田 うちがレアやっただけや。

伊舞 ええ。だから、うちも開拓しなきゃなって思ってる。

玄田 開拓？

伊舞 うちの要望聞いてくれる屠場を。

玄田 あるかいな、そんな奇特なところ。

伊舞 それが、先週、千葉の方で一軒見つかった。

玄田 え？

伊舞 丸元さんより、処理能力高くて規模が大きいところが。

玄田 ホンマに。

伊舞 見つかるもんなんですね。

玄田、伊舞の言わんとしているところを察し、

玄田 で、うちどうするつもりやねん。

伊舞 それを協議しに、今日。

玄田 自分ホンマに新入りか？

伊舞 先週から正式な社員になりましたから、新入りですよ。

玄田 新入りが吐くセリフちゃうやろ。

伊舞 一応跡取りとして教育されましたから。大学が経営学部だったんで、ベースはあるんですけど。

玄田 腹立つわあ、なんか。

伊舞 あ、一応名刺。

と、名刺を渡そうとするが、

玄田 いらん。

伊舞 そうですか。

と、出しかけた名刺をしまう。

伊舞 色んな選択肢があるとは思いますが、こちらのハード面を強化していた
だくのもひとつですし。

玄田 うちの状況見て、ようそんなん言えるな。

伊舞 うちにしたって、いかにブランド力を保ったまま大量生産するかが命題です
か。

玄田 自分の言うところの「命」の大量生産か。

伊舞 繁殖は科学ですよ。

玄田 あっそ。俺にそんな話せんといて。関係ないから。

そこに、沢村が慌てて戻る。

沢村 玄田さん。

玄田 早いな沢村くん。

沢村、走ってきたのか、息を切らしている。

玄田 どしたん。

沢村 柳さんが、

伊舞 逃げてた人。

玄田 柳さんがどないしたん。柳さんおったやろ。

沢村 いました。いたんですけど、

玄田 何。

沢村 柳さんが、屠畜銃持ち出して。

玄田 はあ？

沢村 屠畜銃ですよ、ヤバイですよ。

玄田 どういうことやねん。

沢村 解んないですよ。

玄田 屠畜銃なんか持って、柳さんどこ行ったん。

沢村 それを国本さんたちが探しています。

玄田 何やってねんあの人。

伊舞 屠畜銃って何ですか？

沢村、特に無視する意図はないが、今は構ってられず、

沢村 柳さん何しでかすか解らないから、俺らは見つかるまでとりあえずここで待機
って。

玄田 何しでかすか解らんで、どういふつもりで言うてんねん。

伊舞 屠畜銃って？

玄田、ため息混じりに、

玄田 うっさいの。

伊舞 だって、気になるじゃないですか。

玄田 自分ホンマ空気読まれへんタイプやな。

伊舞 気になることは聞くタイプなんです。

玄田 己で考え。

伊舞 ええ。

沢村 牛の頭に銃撃を当てる器具ですよ。

玄田 ちよう、沢村くん。

沢村 どうせ今動けませんし。

玄田 言うてる場合か。

伊舞 じゃあその名の通り、拳銃なんですか。

と、指を拳銃に。

沢村 形は筒状で、こうやって持って。

と、筒を持つ仕草。

伊舞 へえ。

沢村 牛の頭にトンって当てたら筒の中で火薬が爆発して太い針が出てきて、穴が開くと。

伊舞 頭に？

沢村 それで気絶するから。

伊舞 うわ。ていうか、それ、持ち出したら危ないんじゃない。

沢村 そりゃ。そうですよ。

伊舞 そんな簡単に持ち出せるんですか。

いや、普段はちゃんと管理してる人がいて、誰が使用してるかとか、火薬何発持ってたかとか、ちゃんと記録を取ってます。使用後は使った薬莖（やつきょう）も一緒に持って返すようになってるし。今回は、この混乱に乗じて柳さんが、

玄田 ホンマに柳さんが持ってたんやろな。

沢村 見ましたから。で、延髄も一緒に持ってるんじゃないかって、みんな。

玄田 なんてそうなんねん。

沢村 だってそう考えるのが自然でしょ。

伊舞 あーあ。

玄田と沢村、伊舞に向く。

玄田 なんや。

伊舞 いや。やっぱり撤退が有力かなーって思っ

沢村 え？

伊舞 会社が健全に機能してるとは思えませんし。

沢村 何ですか？

伊舞 合わせて社長にも報告しときます。

玄田 勝手にせえや。今自分にかまってる場合ちゃうねん。

沢村 何の話ですか。

玄田 沢村くん、柳さんどこ？

沢村 え？

玄田 柳さんどこ逃げたん。

沢村 知りませんよ。

玄田 知らんことないやろ。

沢村 どっちしろ今玄田さん行かない方がいいですって。

玄田 なんで。

沢村 ややこしくなるからですよ。それより、伊舞さんと何を話したんですか。

玄田 俺らに関係ない話や。

沢村 どういう意味ですか。

玄田 上同士の話や。一職員が口出すことちゃう。

沢村 それをなんで伊舞さんが玄田さんに話してるんですか。

玄田 こいつの口が軽いからやろ。

と、伊舞を指す。

伊舞 話の流れ上。それに、現場の人たちの話を聞き出すのも、僕の役目だったし。

沢村 え？

玄田 スパイみたいなことしやがって。

沢村 何ですか？ どういうことになってるんですか？

玄田 沢村くん、もうこの件は明日。明日教えたるから。今は柳さんの件、

沢村 柳さんの件は俺らが首突っ込むことじゃないんですよ。

玄田 仲間のことやろ。

沢村、伊舞に、

沢村 撤退って何ですか？

伊舞 玄田さんの言う通り、一職員にお話することじゃなかったかもしれないね。

玄田 今さら何を言うてんねん。

沢村、かまわず伊舞に詰め寄る。

沢村　うちから、ミートセンター丸元から、伊舞ファームさんが撤退するってことですか？

伊舞　現時点では決定じゃないので。またいずれこちらの所長さんの方から話があるかと思えますし。

沢村　決定みたいな口ぶりだったじゃないすか。

玄田　沢村くん、こっちはホンマ俺らがどうこう言う話ちゃうねん。

沢村　だから余計なこと言わないでって言ったのに。

玄田　何も言うてへんわ。

沢村　何も言ってなかったらそんな話にならないでしょ。どうするんですか、今うちから伊舞黒豚引かれたら。

玄田　ええやんけ。それでようやくえこひいきなしで仕事できるやんけ。

沢村　仕事そのものが無くなりますって。会社つぶれますよ。(伊舞に) 手でつぶすの、うちくらいでしょ。どうするんですか、伊舞黒豚。

伊舞　それが、別でうちの要望聞いてくれる屠場が見つかって。

沢村　そんなうちだって要望聞いてるじゃないですか。どういうことすか。

伊舞　僕は一新入社員ですから。

玄田　にしては偉そうな口利いとったけどな。

伊舞　それは売り言葉に買い言葉っていうか、

沢村　やっぱり玄田さん余計なこと言ってる！

玄田　伊舞ファームの豚が別屠室に回ってくるんがおかしいっちゅう話をしただけや。

沢村　一番言ったらダメなことじゃないすか。

玄田　ライン乗せた方が効率いいって沢村くんもいっつも言うてるやん。

沢村　俺はそんなこと言ってますよ。(伊舞に) 言ってますよ。

伊舞は苦い顔で返す。

沢村　本当に。

玄田　どこに媚び売んねん。

沢村　もう、玄田さん。

玄田　そんなこともうどうでもええねん。それより柳さんの方が心配やろ。

沢村　柳さんのことは牛の人たちの問題ですから。ああ、どうすんだよこれ。

と、沢村が悩むのは伊舞ファームの撤退のこと。
頭を抱えて座り込む。

玄田　沢村くん。

沢村 こっちは生活あるんすよ。嫁と子供いて。
玄田 大丈夫やって。

沢村 何が。

玄田 沢村くんは大丈夫や。焼きそばで食いつなげる。
沢村 もう何なんすかそれもう。

玄田 大丈夫ちゃうんは柳さんやろ。

沢村 柳さん今関係ない。

玄田 あるっちゆうねん。柳さん今日明日の話やぞ。もし伊舞ファームに引かれたって、俺らはまだ時間的な猶予あるやろ。技術もある。

沢村 ないですよ。

玄田 あるやんけ。どう考えても柳さんよりあるやんけ。

沢村 柳さんのことより、自分のことですよ。こっちは未来ある若者なんですよ。

玄田 今どうにもならん話やろ。柳さんはな、

沢村 柳さんは今いいんですって。

玄田 柳さん今クビ切られたらたちまち困んねんぞ。

伊舞が不用意に笑う。

玄田、伊舞に視線。

玄田 何がおかしいねん。

伊舞 いや「柳さん」っていったばい言ってるなあって思ってる。

玄田 それが何やねん。

伊舞 すみません、もう、ホント（おもしろいのは）自分だけです。どうぞ（続きを）。

沢村、伊舞には構わず、

沢村 柳さんて秋の大量解雇のとき真っ先にクビ切られてもおかしくなかった人ですよ。

玄田 だから何や。

沢村 「何や」って言われても困りますけど。

玄田 だからこれでクビになってもええっていうんか？

沢村 そうじゃないですけど、別にそこまで肩入れできないっていうか。

沢村、言いくいことを言う準備をして、

沢村 そりゃ玄田さんは大阪時代から柳さんとは色々あったかもしれないけど。

玄田 そんなん関係（「ない」と言おうとするも）、なくはないけど。

沢村 そうですよ。柳さんだからそこまでしようって思ってるんですよ。

伊舞 あれ、柳さんも関西人ですか？ やっぱ仲間意識ってやつですか？
玄田 やかましわ。

伊舞 僕の大学のときの友達もそうだったんですよ。大阪出身のヤツ、
玄田 黙っとけって。

沢村 罪滅ぼしはもういいじゃないですか。

伊舞 え、なんかおもしろくなってきた。

玄田 今度は俺がやったらなあかんねん。

沢村 もう柳さんほとんど完治してるんですよ。

伊舞 完治って？

沢村 玄田さんは十分返しましたよ。今回のは下手したら諸共やられますよ。

玄田 そんなときはそんなときや。

沢村 そこに俺を巻き込まないでくださいよ。

伊舞 大阪で何があつたんですか？

沢村 俺関係ないですから。

玄田 冷たいこと言うなや。

伊舞 ちよつと、無視しないでさつきから。大阪で、何が、あつたんですか？

玄田 何も無い。

伊舞 何も無いことないでしょ。完治ってなんですか？ 何か怪我させたんですか？

玄田 ちよう沢村くん何ヒント与えてんねん。

伊舞 怪我ですね？ どんな怪我を？

玄田 うっさい。

沢村 牛が暴れて、柳さん、腹と腕蹴られて。

伊舞 ええ。

玄田 言うなや。

沢村 玄田さんが放血手間取ってるうちに、

玄田 止めろって。

沢村 飲みに行ったらいつも喋ってくれるじゃないですか。自分がナイフ入れる場所
一瞬見失ったせいで、柳さんの右腕複雑骨折させて、一人の職人人生奪った、
って。

伊舞 そうなんだ。それでなんで二人して大阪出たんですか？

沢村 柳さん、骨折の後遺症がちよつとあって、丸元の方が作業細分化されてるし、
多少負担減るってことでこつちに。玄田さんは一瞬大阪残りかけたけど、やつ
ぱり思うところあって、追いかけてくる形で。

玄田 関係ないヤツに喋り過ぎや。

伊舞 すごい友情じゃないですか。

玄田 そんなんちゃうねんて。

沢村 玄田さん。そういつた過去があつたことは解りますよ。同情もしますし。でも、
柳さんもう引退したっておかしくない年だし、玄田さん、ここまでパーフェク
トなサポートしてきたじゃないですか。これ以上何があるんですか。

玄田　　ちやうねん、それだけちやうねん。助けたらなあかんねん。
沢村　そりや俺には解らない絆があるかもしれないけど。

玄田　頼むわ沢村くん。力貸してえや。

沢村　俺は、正直そんな柳さんと深くないですから。リスク背負ってまで協力できないっすよ。

玄田　沢村くん。

沢村　だって、何て言うんですか。もし柳さん見つけたとして。

伊舞　そりや「早まるな」じゃないですか。

玄田、伊舞をひと睨み。

伊舞　え、ダメでした？

沢村　屠畜銃持ち出すとか、完全に柳さん切れてるじゃないですか。今関わったらなんか取り返しつかないことになるような。

玄田　なんやねん、取り返しつかないことって。

伊舞　延髓と銃使って何するつもりなんでしょうね。

玄田　延髓はまだ柳さんかどうか解らんやろ。

沢村　決まってますよ。延髓を人質に立てこもってるんですよ。

玄田　延髓人質ってどういう状況やねん。

伊舞　想像したらちよつと笑えますよね。延髓がどんなのか知らないけど。

玄田　自分ホンマ帰ってくれへんか。

伊舞　僕基本的に便乗してるだけなんですけど。

玄田、伊舞は捨て置き、

玄田　沢村くん。

沢村　俺に委ねられても困ります。柳さんの件はほとぼり冷めるの待ちましょうって。

今伊舞さんを説得する方が優先でしょ。

伊舞　またその話ですか。

玄田　ほとぼりなんか冷めへんて。

伊舞　僕説得とかされても困るんですよ。

沢村　別屠室をきっかけに会社潰れるとか、マジで御免なんすよ。

伊舞　別にきっかけがどこかないですから。

玄田　沢村くん。

沢村　いい加減にしてくださいよ。柳さんの件は別屠室は無関係でしょ、今のところ。

向こうは向こう、こっちはこっちで解決すべき問題があるじゃないですか。

伊舞　いや、撤退がどうか、ここで解決できないですよ。

玄田　もう無関係ちやうねん。

沢村　玄田さんは黙ってて。

玄田 無関係ちやうねんて。
沢村 何がですか。

玄田、ロッカーへ向かいながら、

玄田 ここにあんねん。
沢村 は？

玄田、そこからナイロン袋を取り出す。

伊舞 あ、さっきなんか隠してた。
沢村 なんすかそれ？

玄田 延髄や。

沢村 え？
伊舞 延髄？

玄田、机の上に置いて座る。

沢村、袋を開ける。

中に延髄が入っているのを見て驚き、玄田に視線。
ニオイが漂ってきて、

伊舞 臭っ。うわ、さっきのニオイ。

玄田 大袈裟な。

沢村 どういうことすか？

玄田 こういうことやろ。

沢村 なんで玄田さんが持つてるんですか。

玄田 柳さんから奪った。どうするつもりやったんかは知らんけど。

沢村 いつ？

玄田 牛の屠室行こうとしたとき、このなんや袋持った柳さんとぼったり会って。相当挙動不審やったから、おかしいな思て。

沢村 やっぱり柳さんだったんじやないですか。

玄田 理由とか何も聞かんとこう思て。これ預かって、柳さんには屠室戻ってもらって。それでお終い：せつかく無かったことにしたる思ったのに。今度は屠畜銃持って逃げるとは思わんかった。

沢村 一体何を。

玄田 自分でも解ってへんねやろ。それくらい追い込まれてんねん。

沢村 「だから仕方ない」、とはならないですよ。

玄田 せやねん。せやからどうしたらええか、困ってんねん。

沢村 とりあえず返しに行きましようよ。延髄。

玄田 あかんよ。
沢村 なんて。
玄田 どう言うて返すねん。
沢村 正直に言ったらいじやないですか。
玄田 正直に言うてどうすんねん。
沢村 え？
玄田 柳さんの過失を減らしたらな。
沢村 どういうことですか。
玄田 延髄は柳さんじゃなかったことにしたらんと。
沢村 そんな、どっちにしろ延髄このままにしてたら、会社に損害出るんですよ。
玄田 牛一頭と柳さん、沢村くんどっち守んねん。
沢村 どっちとかじゃないですよ。
玄田 できることはやったろうや。せめて、延髄は柳さんが持ち出したわけじゃないってことにしたろうや。

説得の視線とそれを受ける間。

沢村 じゃあどうするんですか、それ。
玄田 せやから困ってんねんや。
沢村 ここ置いとけないでしょ。

伊舞が隙を見計らって入ってくる。

伊舞 そつとバレないように返すつてのはダメなんですか？
沢村 え？
伊舞 今、それだけ混乱してるなら、牛の屠室空っぽかも。
沢村 いや、全員が全員いないつてことは。それに、あっち向かう途中で誰にも会わないつてことはないだろうし。
伊舞 でも手薄にはなつてると思えますよ。敵の動きを見計らって潜入して、何気なく転がしておけば。
玄田 ちよう自分楽しんでへん？
伊舞 はい？
玄田 敵つてなんやねん。映画か。映画のつもりか？
伊舞 僕は建設的な意見を言ったまです。ここに置いてある以上、容疑が掛かるのは、

と、2人に視線。

沢村 いやそうだったら柳さんのこと話しますよ。

玄田 あかん。
沢村 何で。

伊舞 うお。(面白くなってきたあの意)
玄田 何やねん自分。

伊舞 いや、僕はバレないように返すのがいいと思います。
玄田 もう自分黙っとって。

伊舞 でもここにあつたらマズインじゃないですか。
玄田 どうする沢村くん。

沢村 どうするも何も、持ってきたのは玄田さんですから。
玄田 柳さんに持たしとくわけにはいかんかったんや。

伊舞 でも、現時点では、大多数が柳さんが持つてるって思ってますよ。
玄田 そんなんわかつてる。

伊舞 柳さんの過失を減らすんならさりげなく延髓戻して「あ、ここにありました！」
ってアピールするくらいしなきゃ。

玄田 さりげなくできるんやったらやつとるわ。
伊舞 やってみなきゃ解らないですって。

玄田がふと思いついて、

玄田 あ。

伊舞 え。
玄田 自分。

伊舞 ?
玄田 自分やん。

伊舞 は?
玄田 持つて行けるの。

伊舞 はい?
玄田 万が一誰かに見つかったても、「見学してました」で通るし。
伊舞 通りませんよ。

玄田 しかも、伊舞ファームの跡継ぎと解れば事も穏便に済む。
伊舞 済まない。親父に怒られます。

玄田 そっと戻すって自分が言い出したんやろ。
伊舞 それは、僕の役目じゃなくて、

玄田、聞かずに、

玄田 よし、行こう、伊舞くん。

伊舞 聞いて。
玄田 ほら、これ持つて。

と、延髓の入った袋を手渡そうとする。

伊舞 ちよつと困ります。

玄田 乗りかかった舟や。

伊舞 降りたい。今すぐ。

玄田 もう遅いわ。ほら、ちゃんと持つ。

伊舞 イヤだ。

と、袋を落とす。

玄田 ちよう、大事なもんやぞ。

伊舞、距離を取って、

伊舞 ムリですから。本当に。

沢村、おもむろに延髓の袋を拾った。

玄田 よっしゃ。沢村くん、そっち逃がすな。

伊舞 いやだ。

沢村、その場から動こうとしない。

玄田 沢村くん？

沢村 すみません。

玄田 え？

沢村 もうちよつと真剣に考えませんか？

伊舞 そうですよ。ホントですよ。

玄田 は？ 真剣やろ。

沢村、延髓をロッカーにしまいながら、

沢村 一回、ロッカーに戻しましょう。誰か入ってきたら言い訳できないし。

玄田 戻してどうすんねん。

沢村 ちゃんとした方法を考えましょうよ。

玄田 そんな言うてる場合ちゃうねん。

沢村 だからってここに出してても仕方ないでしょ。

沢村、ロッカーの扉を閉めると、イスに座り頭を抱える。

沢村 ああ、もう。

玄田 なあ沢村くん、やっぱりまず柳さん探し行こ。

沢村 ムリですよ。

玄田 ムリってなんやねん。

沢村 国本さんたちが探してますから。

玄田 俺らが先に見つけんねや。先に見つけて、ちゃんと話聞いたろ。

沢村 なんで全部ここに持ち込もうとするんですか。これ以上問題抱えられないですよ。

玄田 柳さん助けたらな。柳さん、銃持ってんねんぞ。

伊舞 それ使って自殺とか、あつたらねえ。

玄田 しょうもないこと言うな。

伊舞 そういうニュアンスで言ったじゃないですか。

沢村 柳さんにそんな度胸ありませんよ。

玄田 はずみつちゅうもんがあるやろ。

伊舞 ほらやっぱり自殺。

玄田 うっさい。万が一、取り返しつかんことになったら、柳さんとの奥さん、

と、言いかけて、その後を続けない。

沢村 は？

伊舞 なんですか？ 奥さんが何なんですか？

玄田 自分で自分に教えなあかんねん。

伊舞 乗りかかった舟でしょ。

玄田 お前なんか乗せてへんわ。

伊舞 わお。

玄田 お前みたいなボンボンに柳さんがどんだけ大変な思いしてるか解らんやろ。興味本位で聞くな。

伊舞 僕だって色々大変でしたよ。ねえ？（沢村に）

沢村、伊舞は意に介さず、

沢村 柳さんとの奥さん、手術終わったんでしょ。

伊舞 何の手術ですか。

玄田 ええねん自分は。

沢村 大変って、手術の費用のこと？

玄田 いや、手術のお金は、退職金で賄ったらしい。

沢村 退職金って、今柳さん、

玄田 正規の雇用外れて、契約社員や。

沢村 そうなんだ。

玄田 沢村くんが言うたように、ホンマは前のリストラで切られる予定やってんけど、奥さんの病気のこともあって、その辺の事情を一応酌むってことで、年度末までは契約社員で籍置いたると。それまでに他の仕事探すってことになってて。そうだったんですか。

沢村 それが、矢先に奥さん乳がんがリンパに転移してもうて。

伊舞 乳がん。

沢村 ええ。

玄田 結局看病やなんやで仕事探すに探されへんから、所長に再雇用お願いしたらしいねんけど、会社としたら、退職金も払ってるし、こういう会社の状況やから。ダメだって？

沢村

玄田、頷く。

沢村 それで自棄（やけ）になって。

伊舞 それって、ホントに自殺しかねない状況じゃないですか。

玄田 なんか、俺が怪我させてから柳さんずつついてない感じになってもうて。

俺：

沢村 しゃれになりませんよ、屠畜銃で自殺とか。

伊舞がハツとして、

伊舞 あ、もしかして、逆にそれで所長さんを脅そうとしてるとか。

玄田 は？

伊舞 屠畜銃つきつけて、「金出せ！」って！ ありそうじゃないですか？

伊舞の顔は悪戯に満ちている。沢村が、あまりのデリカシーの無さに、

沢村 伊舞さん、

と、言おうとすると同時に、

玄田 いい加減にせえよお前。

玄田、伊舞の胸座を掴みかかる。

伊舞 ちよっと！

沢村 玄田さん。

玄田 (伊舞に) お前何をぬかしとんのじゃコラ。
伊舞 ちよっと、冗談じゃないですか。
玄田 柳さんとこの大変な話聞いて、まだ面白がれるんか、お前は。
伊舞 別に、そんな、そんなことないですよ。

玄田、伊舞を研磨機のある方へぐいぐい押していく。

伊舞 ちよっと、ちよっと、警察。

玄田 勝手に呼べや。

沢村 ちよっと、ストップ玄田さん。

玄田、伊舞をヘッドロックするような体勢になり、

伊舞 ちよっと、何、もう。

沢村 玄田さんダメですって。

玄田 沢村くん、研磨機のスイッチ入れて。

沢村 はい？

伊舞 え？

玄田 削ったろ、こいつの頭。

伊舞 え？

沢村 何言ってるんですか。

玄田、容赦なくどんどん研磨機へ。

伊舞 ちよっと、スゴイ力。やめて。

沢村が玄田を背後から押さえる。

玄田 離せや。

沢村 玄田さん！

沢村、玄田を何度もぶつ。

玄田 痛っ、痛い。

それようやく離れる玄田と伊舞。
離れた玄田をひたすらぶつ沢村。

玄田 ちよっと、痛い、やめろや。

沢村 (ぶつのを止めて) 何考えてるんですか。
伊舞 もう、びっくりしたあ。痛あ。

と、掴まれていた辺りをさする。
玄田、むしゃくしゃしたままイスに座る。

沢村 玄田さん何考えてんすか。
玄田 あいつが腹立つこと言うから。
沢村 だからって手出すことないでしょ。

伊舞が身なりを正して、

伊舞 訴えますから。
沢村 また。今のは伊舞さんも口が過ぎたというか、
伊舞 訴えてやる。
玄田 勝手にせえや。
沢村 伊舞さん、そういうことを言ったら、また、
伊舞 だって、今の完全に傷害致死罪ですよ。
沢村 死んでないですから。
伊舞 死んでないけど。
玄田 アホちやう。
沢村 玄田さんも。

伊舞、一つ鼻息を吐いてから、

伊舞 思ったとおりでしたよ。
沢村 え？
伊舞 野蛮な人間が多い。
玄田 何やと？

と、立ち上がろうとする玄田。
諫めるように、

沢村 玄田さん。伊舞さんも、ね。
伊舞 沢村さんは、別にあれですけど。
玄田 何や、どういう意味や。野蛮な人間ってなんや。
沢村 まあちよつと落ち着きましようよ。

伊舞、少し落ち着いて、

伊舞 いたんですよ。そういうタイプの人間が。
沢村 伊舞さん。

伊舞 僕が小さいときの話していいですか。

玄田 あかん。

伊舞 話します。

玄田 あかん。

沢村 まあ一回聞きましようよ。

玄田 あかん。

伊舞 うち農家だったじゃないですか。

玄田 あかん言うてるやろ。

伊舞 昔、伊舞黒豚を開発する前は、牛も飼ってたんですよ。

玄田 聞かんやっちゃな。

強引に話を進める伊舞。

伊舞 毎月決まった日に牛積むトラックが来て、うちの牧場から一頭か二頭、連れて行くんです。鼻の輪っか引つ張られて、ひどいときには牛が嫌がってるのに強引に引つ張るから、鼻のここ（鼻の下を指さし）がちぎれて、血がドバドバ出て、それでも、スタンガンみたいなのを使って牛のお尻に当てて、無理矢理トラックの荷台に追い込むんですよ。

玄田 それが仕事やろが。

伊舞 仕事でもなんでも残酷じゃないですか。

沢村 子供の目にはそう映るかもしれませんね。

玄田、視線を沢村に。

伊舞 あれを平気な顔でやってる大人を見て、僕めちゃくちゃ怖くて。

沢村 解ります。

玄田 解るんか？ 沢村くん、ホンマに共感するんか？

沢村、目だけで肯定とも否定とも取れない返答。

玄田、理解できないという表情。

伊舞 人間は仕事だからって言えますよ。でも、牛は何も言えない。僕も幼いなりに牛がどうなるかくらいは理解できて、連れて行く人を「死神」って呼んでましたから。

沢村 なるほど。

玄田 アホなこと言うな。どういう感覚で言っとんねん。

伊舞 でも実際そうでしょ。突如現れて、連れて行かれて、殺されるんですよ。
沢村 牛にしたら死神だ。
伊舞 僕にとっても死神でした。
沢村 ですよ。
伊舞 そのとき、不思議と他の牛達が泣くんですよ。仲間が殺されるってことが解る
みたいで。
玄田 そんなもん自分がペットみたいな気持ちで飼うてるからそう聞こえんねやろ。
伊舞 主観の問題や。
玄田 そうですかね。うちの両親もそう聞こえるって言ってましたけど。
伊舞 完全に教育が間違ってる。
伊舞 道徳的には間違っと思ってますけど。
沢村 確かに。
玄田 何が「確かに」やねん。
伊舞 沢村さんはどうですか？
沢村 え。
伊舞 ここで解体される豚達の声、どういう風に聞こえます？
沢村 うーん。
伊舞 殺されるのを怖がってるように聞こえませんか？
沢村 まあ、そういう風に聞こえることも。
玄田 あるんか？ 沢村くん、自分の言うことに責任持てるんやろな？

沢村返さない。

伊舞 牛は涙を流すんですよ。死にたくないって。
玄田 農家の人間かて、牛にビール飲ませたりして、肉柔らかくするようなことしてるやろ。端っから食肉にするために育てとるくせに何を言うとなねん。
伊舞 うちはそういうことはしてません。
玄田 ほんなら何か。お前んちは肉食わんちゆうんか？
伊舞 それは今関係ないでしょ。
玄田 ある。肉食わんのか。
伊舞 食べますけど。
玄田 食べんねやんけ。
伊舞 今はそういう話じゃなくて。
玄田 どういう話やねん。
伊舞 命の話ですよ。
玄田 またそれか。
伊舞 なんでこの建物の塀を越えたとたん、うちの豚はモノになっちゃうんですか？
玄田 豚は豚、牛は牛や。それ以外の何もんでもない。

伊舞、玄田の返答は聞かず、

伊舞　ここで働く人たちの感覚が麻痺してるからでしょ。麻痺しなきゃ、あんな泣き叫ぶ動物の命を奪えるわけがない。

玄田　話にならん。沢村くん、追い出して。

沢村、動かない。

玄田　どこの新興宗教か知らんけどな、ここに来るんは全部家畜や。商品やろが。食うてんねやろ、お前も。解体の行程なしでお前らの口に肉入らんやないか。そんなことは十分理解しています。

伊舞　理解してへんから「命を奪う」とかいいうセリフが出てきとるんやろが。

玄田　ここで働いている以上、大事なものは気持ちでしょ。生命を食品に変える仕事なんですから、その気持ちが大切なんでしょ。

伊舞　ほんなら何か。一頭一頭「ごめんな」って言いながらつぶせっちゅうんか？　そういうことじゃないでしょ。

玄田　そういうことやろ、お前が言うてんのは。それで何が變わんねん。都合のいいキレイごとばかりぬかしやがって。

伊舞、ヤレヤレという表情。

伊舞　さっき言ってみましたよね、玄田さん。うちの豚解体するの、けったくそ悪いって。

沢村　はい？

玄田　ああ、言うたよ。

沢村　ちよつと、玄田さん、何を言ってるんですか。（伊舞に）違いますよ。そんなの、ちゃんと命尊重してやってます。

玄田　ウソばかり言うな。

沢村　本当ですよ。少なくとも僕は。

玄田　沢村くん、何を怖がっとなねん。

沢村　何がですか。

玄田　切られるときは切られんねん。本音曲げたら負けやろ。

沢村、伊舞に向って、

沢村　僕はちゃんとした気持ちで伊舞黒豚を解体させてもらってます。

玄田　もうやめえや。伊舞ファームのキレイ事に付き合ってたとったら身がもたんぞ。

伊舞　キレイ事なんかじゃない。うちが丹精込めて生産している伊舞黒豚の命を扱ってるんです。ちゃんとした気持ちで解体してほしいじゃないですか。

玄田 それで自分とこも金儲けしてんねやる。こっちにだけ命背負わすなや。

伊舞 実際に手を下してるのはそっちでしょ。一体どういう人たちがやってるのか気になって来てみたら、思ったとおりでしたよ。

玄田 お前、ホンマに頭削ったるか。

伊舞、玄田から安全な距離を取りながらも、

伊舞 ほら、すぐそういうことを。玄田さんみたいな野蛮な人にうちの豚触ってほしくないんですよ。

玄田 こっちこそ願い下げじゃ。あんなしょうもない豚。お前んところは豚も人もろくでなしばかりか。クソボケカス。

伊舞 ちよっと！

伊舞の声にかぶって、

沢村 玄田！

と、玄田の胸ぐらを掴み、過去の二人の関係では有り得なかった怒号。

沢村 いい加減にしろよ。勝手なことばかり言いやがって。

玄田 なんやねん。

沢村 さつきから、もう…

沢村、玄田を乱暴に離し、伊舞に。

沢村 すみません、伊舞さん。

伊舞 もう遅いですよ。

沢村 解りました。伊舞さん。俺、玄田さんを別居室から外してもらおうように頼んでみます。

玄田 え？

沢村 俺、所長に掛け合います。

玄田 沢村くん？

沢村 それで満足でしょ？ それで「けったくそ悪い」仕事から解放されるじゃないですか。(伊舞に) そういうことなんで、どうか伊舞黒豚の撤退だけは勘弁してください。

伊舞 いや、

沢村 この通り。お願いします。

と、ついには土下座。

玄田 何をやっとなねん。
沢村 玄田さんこそ俺がいない間に何やってたんすか。職を奪うようなこと言って。
玄田 逆や。自分やろ、俺のこと売ろうとしたん。
沢村 俺は辞められないんすよ。絶対。
玄田 そんなんわかつてる。
沢村 俺、この仕事以外ないんすよ。
玄田 俺かてそうや。それを冒流するようなヤツ、許されへんやろ。
沢村 伊舞さんは俺たちの、ミートセンター丸元の命綱でしょ。
玄田 いつ切れてもおかしくない命綱なんか頼ってたらそのうち落ちんぞ。
伊舞 また命綱とか、そんな大袈裟な。もつとちゃんと企業努力して、健全な経営を、
玄田 口挟んでくんないな。
伊舞 だってそうじゃないですか、
沢村 切れませんよ。(伊舞に) ねえ？
伊舞 だから、

伊舞の言葉を聞くより早く、沢村が自分の腰につけているナイフを取り出す。

伊舞 ちよつと？
沢村 お願ひしますよ。
玄田 ころころ、沢村くん。
沢村 もう俺意味解んないですよ。
玄田 何してんねん。
沢村 なんで玄田さんは柳さんのことばっかで、俺のこと考えてくれないんすか。
玄田 考えてるって。
沢村 俺の人生はどうなるんすか。玄田さん責任とつてくれるんすか？
玄田 なんで俺が。
沢村 玄田さんのせいでしょ、全部。
玄田 なんで俺のせいやねん。こいつがここに来たんが間違いやろ。
伊舞 ちよつと、とばっちり。
沢村 どっちですか？ どっち切ればいいんですか？
玄田 どっちってなんやねん。どっちもない。
沢村 もう後に引けないでしょ。
玄田 引ける。沢村くん。落ち着け、落ち着け。
沢村 玄田さん切ったらいいんですか？ それとも、
玄田 アホなこと言うな。
沢村 それとも伊舞さん？
伊舞 自分が何してるか、解ってるんですか？
沢村 解ってませんよ。ただ、

玄田 アカン。アカンて。仕舞えって。

沢村 ただ、俺、守らなきゃいけないんすよ。嫁も息子も。

玄田 解ったから。そんなもん持ち出したら守れるもんも守られへんなるで。

沢村 麻痺してますから。ニオイと一緒に、もう慣れちゃってるんすよ。ナイフで肉切ることくらい。

玄田 アホアホ。何言うてんねん。あかんて、沢村くん。しつかりせえって。

沢村、ナイフを下ろして、立ち尽くすようになり、

沢村 お願いしますよ。俺、俺、

ようやく玄田が沢村との距離を詰めて、

玄田 大丈夫や。なんも、会社がつぶれるわけちゃう。

玄田、沢村から静かにナイフを預かり、テーブルの上に置く。

伊舞 むちゃくちゃだ。

そこに、内線電話が鳴る。

しばらくコールがあつてから、おもむろに伊舞が受話器をあげる。

玄田 おい、何してんねん。

伊舞、相手の声を聞くよりも先に、

伊舞 なくなつた延髄、別居室にありますので、すぐ来てください。

玄田 何を言うтонねん。

伊舞、それだけを言って受話器を置く。

玄田 お前！

沢村 もう終わりだ。

玄田 何も終わりちゃう。

沢村、携帯の待ち受け画面の家族に、

沢村 翔太、ごめんな。

玄田 ちよう何やっтонねん。

伊舞、ロッカーから延髓を取り出す。

伊舞 全部話しますから。

玄田 何やと。

伊舞 ヘッドロックされたことも、刃物向けられたことも、延髓のことも。

玄田 お前殺すぞ。

伊舞 やって見たらいいじゃないですか。言ってるうちに人が来ますから。

と、扉側に視線。

玄田も伊舞の視線を追う。時間は無いと判断し、実力行使。

玄田 返せ！

と、延髓を奪いに掛かる。

伊舞 イヤですよ！

と、言うも、いとも簡単に延髓が奪われそうになる。

伊舞 ああ！

玄田 何が「ああ」じゃ！

伊舞 ああ、ちよつと。

立ったまま取っ組み合うような構図。玄田が優勢で、延髓の入った袋は2人の手でもみくちや。

伊舞 ちよつと、こんなことしていいんですか！ もうすぐ人来ますよ！

玄田、延髓の袋を伊舞の口元に押し当てていく。

伊舞 ちよ、ちよつと？ ちよつと、気持ち悪い！

玄田 食え！

伊舞 は？

玄田 延髓食うて、証拠隠滅や。

伊舞 バカ言わないで。BSEが！

玄田 アホか、昔は食つとつたんじゃ。

伊舞 ウソだ！

玄田 ホンマじゃ！

口にどンドン押し当てられ、

伊舞 うえっ！

玄田 食えや！

伊舞 ムリ。ビニール袋が。ちよつと、誰か！

玄田 くそ。

と、玄田、延髓の袋を奪って、結びを解き、再度伊舞に寄りかけたところ、伊舞がテーブルの上のナイフを手にし、不器用に玄田に向ける。

玄田 何のつもりや。

伊舞 むちゃくちゃだ。

玄田 脅してるつもりか？

伊舞 それ（延髓）、こつちに貸してください。

玄田 何やねん。

伊舞 いいから貸して。テーブルの上に置いて。

玄田、延髓の袋をテーブルに。

伊舞、延髓を拾って、また玄田に刃先を向ける。

伊舞 もう下手なことしないでください。全部話しますから。

そのとき、沢村が携帯電話のカメラで伊舞を撮影した。
シャッター音に視線。

伊舞 な。

玄田 こんなときに何してんねん。

沢村、今撮った写真を保存している。

沢村 保存しました。

玄田 沢村くん。

沢村 保存しました。

伊舞 なんですか。どういうつもりですか。

沢村 お気に入りに登録しました。

玄田 沢村くん、ほんまにおかしなったんか。

沢村 これ削除してほしかったら、伊舞黒豚、撤退しないでください。
玄田 どういう取引やねん。

沢村 延髄奪ったのも伊舞さん、ナイフ向けてるのも伊舞さん。これ、動かぬ証拠です。

と、携帯の写真を掲げて。

玄田 おお！

伊舞 でたらめ言わないでください！

玄田 そういうことか。

沢村 玄田さん、それでいいですよ。

玄田 どんだけ機転利くねん、沢村くん。

伊舞 ちよっと。

沢村 お願ひします。伊舞ファームの跡取りがナイフで取引先脅してたなんて、この業界で噂になったらまずいでしょ。

伊舞 卑怯じゃないですか。

玄田 散々卑怯なこと言うてきたんは自分やろ。沢村くん、それユーチューブで流したろ。

沢村 これ静止画ですから。

玄田 ほんならブログや。

伊舞 やめてください。削除してください。

沢村 じゃあ撤退の話は取り下げてくれますか？

伊舞 解りました。

沢村 え？

伊舞、耐え切れなくなり、延髄もナイフもテーブルに置き、沢村の携帯を奪おうと向かっていく。

伊舞 返して！

沢村 ダメですよ！

玄田 こら、ええ加減にせえよ。

伊舞 どっちが！

と、携帯を奪い合っているとき、玄田が気づいた。

玄田 あ。

と、動きを止め、窓の外、屋上の上に柳の姿を確認する。

沢村 え？

玄田 あれ。

と、指差し、

玄田 柳さん？

伊舞 え？

沢村と伊舞、玄田の視線を追う。

玄田 柳さん、屋上におる。

沢村 あれ、右手。やっぱ屠畜銃持ってるじゃないですか。

玄田 何する気や。

そのとき、部屋をノックする音。国本だろう。3人、扉に視線。そして、慌てて延髓を意識。

玄田 延髓！

策も無く延髓を取りに行こうとしたとき、外で屠畜銃が発射される火薬の濁いた音がした。

3人、窓の外に視線。

次いで、部屋の扉が開けられた。

3人、扉に視線。

* * * * *

1週間経って。

午後3時過ぎ。昼飯にカップラーメンをすすする沢村。傍らにノートを広げ、たまにカップの表示を見てはメモを取る。そこによれたスーツを着た玄田が入ってくる。

沢村 玄田さん。

玄田 あーくそ。どんだけ所長話長いねん。

沢村、大きさに立ち上がり、頭を下げ、

沢村 お勤め、ご苦労様です。

玄田 お勤めって何やねん。あーしんど。今何時？

沢村 3時過ぎですかね。

玄田 2時間がつつりやで。

沢村 玄田さんのスーツはじめて見た。

玄田 成人式の時作ったヤツや。

沢村 ウソ。

玄田 ウソじゃ。

沢村 何すかそれ。

玄田、沢村のカップラーメンに気付き、

玄田 ていうか、沢村くん。

沢村 はい？

玄田 カップラーメン食べてるやん。

沢村 ええ。

玄田 え、いつから？

沢村 玄田さんの謹慎中に。

玄田 え、そうなん？ UFOは？

沢村 あれは、まあ、いいんです。

玄田 え、なんで？ めっちゃ好きやったのに。

沢村 まあそれも過去の話ですよ。

玄田 何それ。俺完全に浦島太郎やん。何やこの陸地の変わり様。

沢村、明らかに顔が綻んで、

玄田 なんなん、どうしたん。

沢村 聞いてくれます？

玄田 絶対聞かなあかん状況やん。

沢村　うちの息子がね、将来ラーメン屋になるんだって言い出したんすよ。
玄田　ラーメン屋。

沢村　ちよつと前に博多ラーメンの専門店が近所にできて、家族で行って
玄田　へえ。

沢村　確かにうまくて、そのとんこつラーメン。翔太、完全に虜になったみたいで。
玄田　渋い小3やな。

沢村　で、あいつの夢の手助けにと思って、インスタントのとんこつラーメンの調査
玄田　を。最近の結構すごいんですよ。

玄田　で、メモ書きまでしてるん？

沢村　まあやるからには。

玄田　せやけど、なんか言うとったやん。翔太くんが、なんや沢村くんのニオイがど
うとかって。

沢村　ちよつと玄田さん鈍感。

玄田　は？

沢村　ここまで聞いても解んないんですか？　あいつが親の仕事に一定の理解を示
したってことでしょ。

玄田　何でそうなんねん。

沢村、これぞ極め付きという感じで、

沢村　あいつね、将来とんこつラーメン屋を開くから、お父さん、いい豚骨持って帰
って来てねって言うんですよ。

玄田　え、どういうこと？

沢村　俺がつぶした豚の骨を持ってきてくれと。

玄田　ああ、そういうこと？　って、息子小3やろ。真に受けたら痛い目見るで。そ
んなん気まぐれの夢の話しやんか。

沢村　いや、あいつの目は真剣でしたからね。なんか、今年のクリスマスは麺を湯切
りする、こうやってやる（湯切りをする振り）、棒のついたザルが欲しいって
言ってますから。

玄田　それはちよつとおもろいな。

沢村　あのザルどこで売ってるんでしょうね。

玄田　知らんし。

沢村、最後の麺をすすって、

沢村　ふう。うまかった。まだ玄田さん（時間）いいんでしょう？

玄田　おお。

沢村　ちよつと汁捨ててきます。あ、コーヒー入れましようか。

玄田　あ、ええわ。さつき缶コーヒー飲んだし。

沢村 ああそうすか。

と、容器とゴミを持って給湯室に。
その間、玄田、名残惜しそうに研磨室を見ている。
沢村戻る。

沢村 いやいやいやいや：

と、言いながらイスに座る。
玄田が神妙な切り出し、

玄田 沢村くん、

沢村、空気か感じて構える。

沢村 ああ、はい。

玄田 俺。

沢村 辞めるんすか？

玄田 なんでやねん。辞めてほしいんか。

沢村 ああ。

玄田 「ああ」って何やねん。ちやうよ。俺、牛の屠室に戻ることにってん。

沢村 あ、そうなんすか。

玄田 うん。

沢村、なるほどという感じで頷いている。

玄田 え、何かないん？

沢村 何かって？

玄田 「そんな！」 みたいな。

沢村 いや、だって、仕方ないんじゃないですか。むしろ1週間の自宅待機と配置換
えで済んで御の字でしょ。

玄田 なんでやねん。

沢村 なんてって。そうでしょ。

玄田 ていうか、沢村くんは何なん。何でお咎め無しなん。

沢村 そりゃ日ごろの行いじゃないですか。

玄田 あ、そういうこと言う。

沢村 で、柳さんはどうなったんですか。

玄田 柳さん。

沢村 ええ。

玄田 柳さんな。

沢村 うん。

玄田 柳さん、完全に俺のこと売った。

沢村 ええ？

玄田 柳さん、俺に延髄奪われたって所長に言うたんやって。

沢村 ええ：

玄田 驚き桃の木あその毛やわ。

沢村 え、あそのの？ 何すかそれ。

玄田 なんでもない。あー、柳さん何で言うねん。

沢村 まあでも事実ですからねえ。

玄田 せやけど、別に俺の名前出さんでええやん。ほんま何がしたかってんあの人。屠畜銃、空に向けてぶっぱなして、何のアピールやってん。

沢村 玄田さんこそ、柳さんかばって何がしたかったんですか。

玄田 やかましわ。

沢村 で、柳さんどうするって？

玄田 ああ、奥さんと一緒に大阪戻るらしいわ。

沢村 大阪？ あ、そうなんすか。

玄田 おお。うちのがお見舞い行くとか言うてたけど。

沢村 ふーん。結局クビか。世知辛い。

玄田 まあしやあないわな。

沢村 そこはかばってあげないんですね。

玄田 もうどうしようもないねんて。あーくそ、もう全部あいつのせいや。

伊舞のことだ。沢村は返さず。

玄田 なあ、聞いた？ 沢村くん。

沢村 え？

玄田 あいつ千葉の屠場がどうか言うてたやん。

沢村 はあ。

玄田 あれ、完全に吹かしやってんで。

沢村 ああ。

玄田 腹立つわあ。腹立たへん？

沢村 まあいいじゃないですか。

玄田 なんや、結局そこも手でつぶすつぶさんでもめたらしくて、受け入れポシャってんで。

沢村 おかげでうちと今まで通りに取引してくれるんだし。

玄田 今まで通りちやうって。俺、異動させられてるし。

沢村 ああ。

玄田 あいつほんま何しに来てん。

沢村 台風が通り過ぎたって思うしかないですね。
玄田 あーあ、俺別屠室の方が好きやのになあ。マイペースでできるし。
沢村 あれ、何か言ってること変わってません？
玄田 ええねん。ていうか、沢村くんなんであの写メ出してくれへんかったん？
沢村 え？
玄田 決定的証拠。
沢村 まあ、向こうも口割らなかつたし、あんなもん出してもボロ出て收拾つかなく
なるのがオチですから。
玄田 使えんのう。
沢村 もういいじゃないですか、この話は。それより、今日この後特にないんでしょ？
玄田 え？
沢村 俺A勤ですし、久しぶりに行きませんか？

と、酒を飲む仕草。

玄田 それがあかんねん。
沢村 なんだ。
玄田 今から研修やって。
沢村 何すか研修って。ていうか今さら玄田さん。
玄田 いや、あれやで。俺が研修する側やで。若い子らに手捌きの全行程見せろって
所長が。
沢村 ああ。
玄田 完全に罰ゲームや。
沢村 ゲームではないでしょ。罰ですよ、ただの。
玄田 沢村くん一緒にやってえや。
沢村 嫌ですよ。
玄田 なんか社外からも何人か来るらしいし。
沢村 なおさら嫌だ。
玄田 何やねん。何やねん俺と沢村くんのこの差は。
沢村 ほら、ゴチャゴチャ言ってるやないで。その研修、何時からですか。
玄田 3時から。
沢村 つてもう過ぎてるじゃないですか。用意しなきや。そんな薄汚れたスーツ着て
ないで。
玄田 嫌や。
沢村 これさぼったら本当にクビになりますよ。
玄田 嫌や。
沢村 ダメですって。
玄田 沢村くん、嫌や。
沢村 子どもか。

と、2人がぐにやぐにやしてるところに、研磨室の扉が開いた。白衣をまとった伊舞が立っている。沢村と玄田が視線をやる。

沢村 え？

伊舞、表情も変えず、

伊舞 時間過ぎてるんで、早く来てくれって。

と、伝言を持ってきた。

沢村 今日：（伊舞さんも？）

伊舞 いや、親父に、あ社長に言われて。現場見してもらっとけって。

沢村 ああ：

沢村、玄田に視線を送る。
長い沈黙の後、

玄田 誰がお前になんか教えるか。

沢村 玄田さん！

玄田 ウソじゃ、行くぞ。沢村くんも来い！

と、伊舞を追い越して出て行く。

沢村 ちよつと？（伊舞に）あ、行きましようか。

伊舞 あ、はい。

沢村 ちよつと玄田さん。

と、扉に向かったところ、玄田が戻って、

沢村 うわ。

玄田、沢村に構わず、伊舞に向かい、

玄田 びっくりするような仕事見せたるからな。

伊舞、何も返さず玄田を見つめる。

玄田 何見てんねん。返事せえや。

沢村 もう玄田さんやめてくださいよ。行きましょう、ね、行きましょう。

伊舞に振り返り、

沢村 伊舞さんも、ね。

伊舞 あの。

沢村 ん？

伊舞 今日の研修で使う豚って、うちの豚じゃないですよね。

沢村は、伊舞の発言の真意をみつめる。

沢村 え？

そして、明日も食肉解体・加工業務は続いていく。

了